

都市論再考 —古代西アジアの都市化議論を検証する—

小 泉 龍 人*

An Archaeological Review of the West Asian Urbanization — Comparison and Investigation of the Previous Studies —

Tatsundo KOIZUMI*

Abstract

Many discussions about urbanization in the ancient world have been heavily derived from ‘The Urban Revolution’ of V. Gordon Childe in 1950. Proposing ten criteria deducing from archaeological data, he distinguished the earliest cities from any older or contemporary villages, and thought irrigation cultivation in the valleys of the Tigris-Euphrates and others had begun to yield a social surplus. Concerning the urbanization in West Asia, thereafter, archaeologists and anthropologists became to sustain and develop the Childe’s scenario that plenty of food surplus accumulated by the growth of economic subsistence through the irrigational agriculture in the southern Mesopotamia might have triggered the emergence of social surplus and differentiation which are invariably observed in urbanized society. Most of the scholars have held a general view on the Mesopotamian urbanization that the ancient culture or society evolved in the Uruk period through 4th millennium B.C.E., and then the earliest city emerged in the second half.

After the Childe’s theory, debates on processual archaeology and studies of settlement pattern brought about the trend of viewing urbanization as state formation in West Asia and other regions, especially driven by American anthropological archaeologists like Robert McC. Adams in the 1960s to 1970s. Throughout the past decades theoretical models of sociocultural evolution searching into the complexity had deeply influenced on the West Asian field, forming a paradigm of the early state formation based on a theory of social development as simple to more complex. As there have been gathered much data of the urbanization or state formation in West Asia, particularly northern Syria and southeastern Turkey around the 1980s, the Uruk expansion model began to fascinate archaeologists in various way.

On this article I review several key discussions on the study of the urbanized process in West Asia after the Childe’s concept including the ten traits for early cities, and come to debatable issues of the archaeological researches. This paper, at last, shows a working hypothesis how we can indicate the difference between ordinary settlement, partly urbanized one, and full-urbanized city in the ancient West Asia. At earlier stage of the formative periods of urbanization throughout the 5th millennium B.C.E., the Ubaid culture had been prevailed into the southeast Anatolia, north Syria, Mesopotamia and southwest Iran regions. Most of the settlements during the period are ordinary, with a few settlements partly urbanized like Eridu and Tepe Gawra. In the later stage of the West Asian urbanization, there have been seen the Uruk culture distributing wider area than the Ubaid. Some Uruk settlements are partly urbanized, others remained ordinary, and only two sites have been identified as full-urbanized city, Uruk in Sumer and Habuba Kabira south in northern Syria.

* 国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員

はじめに

一般的な都市論の嚆矢は、G. チャイルドに拠るところが大きい。とくに、古代西アジアの都市化に関しては、生業経済の発展によりもたらされた食糧余剰が社会余剰へと昇華して、都市的な特徴が累積していったという図式で議論が展開していく。その後、人類学における段階的な社会進化論の提示や、セトルメントパターン研究の台頭などにより、西アジアにおける都市化は国家形成として語られる傾向が強くなる。その学史的背景には、北米人類学＝考古学界の影響が大きい。小稿では、チャイルド以降の都市論の軌跡を辿りながら、西アジアの都市化をめぐるさまざまな議論のなかで主要なものを検証していき、都市化研究の問題点を整理してみる。

1. 都市化議論の嚆矢

1.1. チャイルドの都市革命論

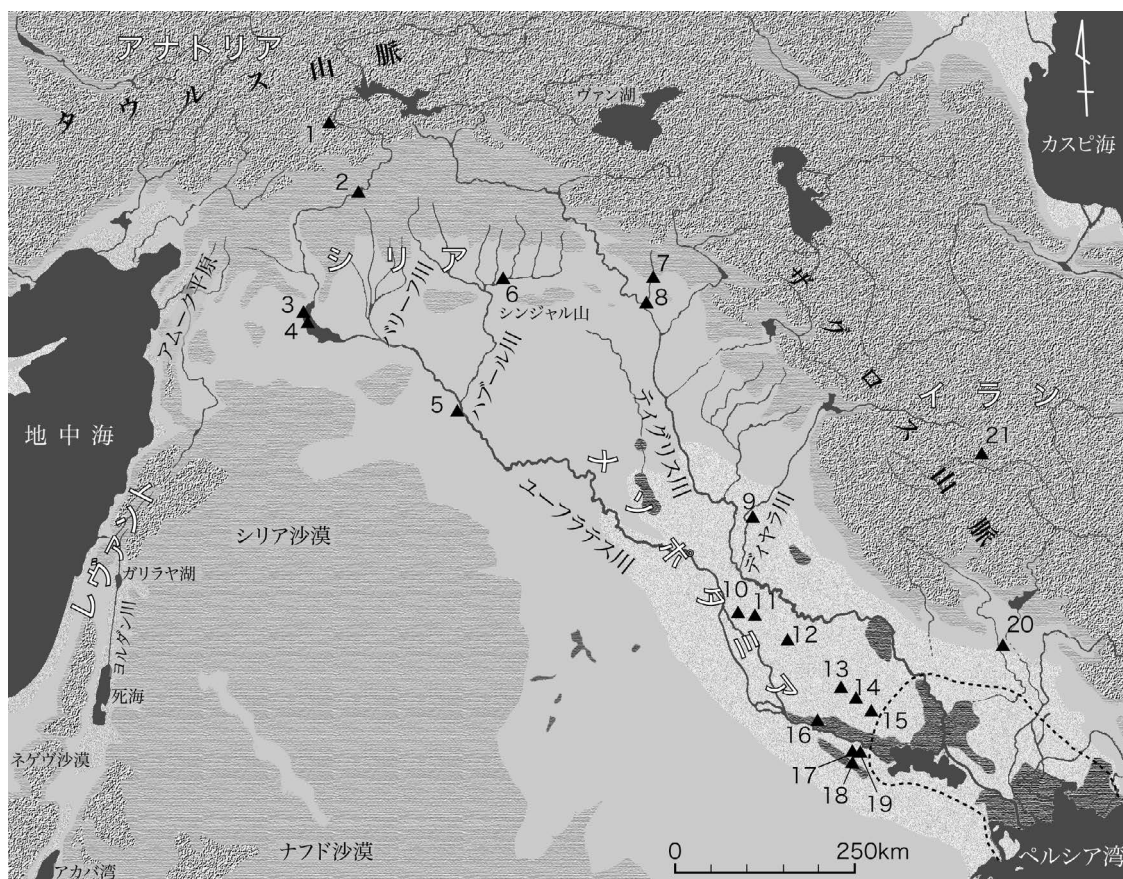
古代都市の厚い研究層のなかで、小稿では、学史において重要と考えられる先行研究に絞って検証してみる。まず最初に挙げられるのが、西アジアに限らず古代都市研究で頻出してきた V. G. チャイルドの「都市革命 Urban Revolution」論である。

チャイルドはオーストラリア生まれで、1920年代に再渡英した後、スコットランドを手始めにヨーロッパの考古学の基礎を築いただけでなく、近東（西アジア地方）の考古学に多大な影響を与えた。日本でも良く知られた外国の考古学者の1人である。チャイルドは、現代の考古学の基礎となるさまざまな定義や方法論を確立しただけでなく、農耕牧畜の始まりや都市（City）の出現を革命（Revolution）的であると提唱した。ただし、彼の言う革命とは、あくまでゆっくりとした累積過程の結果であり、決して劇的な変化を意味していたわけではない（西アジア考古学勉強会 1994）。チャイルドは、都市革命論において、最古級の都市を10項目の条件により定義している（Childe 1950: 9-16）：

- (1) 大規模集落と人口集住、(2) 第一次産業以外の職能者（専門の工人・運送人・商人・役人・神官など）、
- (3) 生産余剰の物納、(4) 社会余剰の集中する神殿などのモニュメント、(5) 知的労働に専従する支配階級、
- (6) 文字記録システム、(7) 暦や算術・幾何学・天文学、(8) 芸術的表現、(9) 奢侈品や原材料の長距離交易への依存、(10) 支配階級に扶養された専門工人。

チャイルドは、メソポタミアのウルク、インダスのモヘンジョダロやハラッパーといった旧大陸の事例を中心にして、新大陸のマヤも辛うじて見据えながら、古代都市を村落から区別しうる10項目の条件を素描している。これらの条件は考古学的資料にもとづいて提言されたものであり、1950年代以降の古代都市研究の起点となっている。たしかに、チャイルドの10項目の条件は無関係の特徴を一緒くたにしているという批判もあるが、古代都市論において、必ずと言っていいほど彼の定義は引用されてきている（cf. Van De Mieroop 1997; Smith 2009）。

古代西アジアの実例に照らし合わせると、当時、チャイルドの提示条件をほぼすべて満たす最古級の都市はウルク遺跡（イラク）に限られていた（図1）。その後、新たに発見された同時期の都市ハブーバ・カビーラ南（シリア）は、ウルクの都市計画性を模倣して設計されたと考えられている。60年ほど前に彼の唱えた都市の定義は、



- | | | |
|--------------|------------|---|
| 1 アルスランテペ | 12 ニップール | <div style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #cccccc; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></div> 1000m～
<div style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #a6a6a6; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></div> 500～1000m
<div style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #d3d3d3; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></div> 200～500m
<div style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: #f5f5f5; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></div> ～200m
<div style="display: inline-block; width: 15px; height: 10px; background-color: black; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></div> 海・川・湖
<div style="display: inline-block; width: 15px; border-bottom: 2px dotted black; margin-right: 5px;"></div> 前4千年紀の推定海岸線 |
| 2 ハッセク・ホユック | 13 ウンマ | |
| 3 ジャバル・アルーダ | 14 ギルス | |
| 4 ハブーバ・カビーラ南 | 15 ラガシュ | |
| 5 テル・クラッヤ | 16 ウルク | |
| 6 テル・ブラク | 17 ウバイド | |
| 7 ニネヴェ | 18 エリドゥ | |
| 8 テベ・ガウラ | 19 ウル | |
| 9 エシュメンナ | 20 スーサ | |
| 10 バビロン | 21 ゴディン・テペ | |
| 11 キシュ | | |

図1 本稿で扱う主要遺跡（筆者作成）

いまだに西アジア考古学における都市化議論の入口となっている。

チャイルドの都市革命論は、灌漑農耕によりもたらされた食糧余剰が社会余剰へと昇華していき、さまざまな都市的な特徴が累積して、上記10項目で定義されるような都市が出現した、というものである。その論理展開は、遺構・遺物などの考古資料にもとづいて工芸技術や生業経済の累積的な発展を捉えていく、いわば積上げ的手法である。

都市革命論の根幹には、経済における諸関係が歴史変化の主要因であるという唯物史観があり、チャイルドはマルクス主義を応用して技術的变化が社会進化を促すと考えていた。賛否は別にして、彼が日本の考古学界に知られているのは、こうした方法論が戦後日本の学問的風土に馴染みやすかったという点もある。ただ、晩年になると、チャイルドはマルクス主義では軽視されていた社会的価値や宗教的要因をも取り込んでいったため、難解な思考の持ち主という印象を与えてしまっている。

同時に、チャイルドは、都市革命論において権力や支配の存在を大前提とする演繹的アプローチをあえて取らなかったと思われる。彼は「国家 State」や「都市国家 City-state」という表現を使わず、古代都市の構造を「国家機関 State organization」、すなわち「国家的な組織」と呼ぶに留めている。先史考古学の立場から、文字を伴う古代文明がいかにして形成されていったのかを追究していたチャイルドにとって、国家とは複雑化する社会が変遷していく到達点であったと推測される。国家は考究により証明すべき社会形態であり、検証済みの出発点とすることはできなかったのである。

その背景には、19世紀後半より台頭してきた民族主義や国家主義（ナショナリズム）が20世紀前半の考古学の動向に色濃く影響していたと推定される。当時、文化変化を民族の交替や移住などで解釈する伝播論が、19世紀に挫折した単系進化論に代わって流行っていた。とくに、ドイツの考古学者 G. コッシナの「ゲルマン民族主義」がナチスに支持されたことにチャイルドは強い嫌悪感をおぼえ、考古学的文化と特定の人種や民族を結びつけるコッシナ流の伝播論から距離を置くようになった。

O. モンテリウスと同様に、チャイルドも穏健派の伝播論者であった。そして、モンテリオスの「考古学的型式論」にのっとり、一定の型式を共有する遺物や遺構のかたまりを一つの考古学的な文化と捉えて、文化の変化は型式に反映されると考えるようになる。チャイルドは、民族や人種という偏見を拭って、文化の変化を映し出すモノとして考古資料を扱ったのである。そして、晩年の都市革命論を提言する頃には、モノの集積から成る考古学的文化から人間生活の変化パターンを読み取り、社会の組織的体系を説明するべきであるとしている。

つまり、チャイルドの洞察対象は、国民国家から切り離れたモノとしての考古学的文化から始まり、やがてモノの担い手である人間とその社会へ回帰することになる。チャイルドの都市革命論は、遺構・遺物の時系列における累積的な変化を追いかけて、これらが映し出す社会体系の進化の帰結点として都市を見据え、社会発展における都市段階を10項目で定義したものといえる。

1.2. ビータックの都市論

チャイルドのほかに、エジプト学者の M. ビータックも古代都市の定義を試みている（Bietak 1979: 103-104）。彼は西アジアの証拠をもとにして、都市と非都市の区分を9つの条件で定義している。ビータックによると、これらの9箇条は古代エジプトの事例にも適用できるとしている。川西宏幸が的確に訳しているので以下に紹介しておく（川西 1999: 103-104）。なお、同訳は箇条書きの順番で原文と一部異なるが、ここではビータックの配列の通りにしてある：

1. 高密度の居住、2. コンパクトな居住形態、3. 住み分け、4. 行政・裁判・交易・交通の地域的中心、5. 非農業共同体、6. 物資・技術の集中、7. 労働・職業の分化と社会的階層性、8. 宗教上の中心、9. 避難・防衛の中心。

川西の指摘によると、これらの条件をすべて満たした集落こそが都市であるが、そうでなければ非都市というわけではない。つまり、ビータックの9箇条は都市性を測る物差しとして理解すべきだという。チャイルドの10項目とおおまかに比べてみると次のようになる（表1）：

表1 チャイルドとビータックの都市定義の比較

チャイルド	ビータック
(1) 大規模集落と人口集住	1. 高密度の居住 2. コンパクトな居住形態
(2) 第一次産業以外の職能者	5. 非農業共同体 7. 労働・職業の分化と社会的階層性
(3) 生産余剰の物納	6. 物資・技術の集中
(4) 社会余剰の集中する神殿などのモニュメント	8. 宗教上の中心
(5) 知的労働に専従する支配階級	7. 労働・職業の分化と社会的階層性
(6) 文字記録システム	?
(7) 暦や算術・幾何学・天文学	?
(8) 芸術的表現	?
(9) 奢侈品や原材料の長距離交易への依存	cf. 4. 行政・裁判・交易・交通の地域的中心
(10) 支配階級に扶養された専門工人	cf. 7. 労働・職業の分化と社会的階層性

ビータックの3. 住み分け, 4. 行政・裁判・交易・交通の地域的中心, 9. 避難・防御の中心といった条件は, チャイルドの各項目に対応させることが難しい。一方, チャイルドの着眼していた(6)文字記録システム, (7)暦や算術・幾何学・天文学, (8)芸術的表現といった諸項目は, ビータックの物差しに当てはめることができない。その原因は両者の目線の違いにある。チャイルドは遺構と遺物の集積である考古学的文化を起点として, 文化の変化を示す技術的な変化パターンを通して, 社会的な構造や体系の発展を洞察した。彼はモンテリウスの型式論による考古資料の型式分類をもとに, C. J. トムセンの「三時代法: 石器時代, 青銅器時代, 鉄器時代」による技術的变化を, L. H. モルガンとF. エンゲルスによる「段階的な社会発展: 野蛮, 未開, 文明」に整合させようとしたのである。

他方, ビータックは, 西アジアの先行研究で提示されていた都市(彼の呼ぶTown)の事例をエジプトに応用しながら, 作業仮説的に上記9箇条を提唱した。彼によると, 西部デルタ地域やコプトスーナカダ地域などは, 長距離交易に優利な立地にあり, かつ豊富な食糧生産をもたらす土地でもあった。これらの地において同時に都市化が進行していき, 余剰食糧の集積により経済的かつ行政的な権力の執行者が扶養される環境が整えられていった。

そして, 先王朝時代末のわずかな期間でメンフィスを都とする統一王朝が出現していったとしている。古代エジプトの都市化研究では, 生活の基盤である集落がどのような変遷過程を辿っていたのか, という時系列での復原が組み立てにくい。その代わりにビータックは, 統一王朝の出現経緯において, いかにして政治的権力が集中していったのか, という視点で先王朝時代の社会変化を捉えようとしていたのである¹。

また, チャイルドの論考が出版された1950年と, ビータックの所収論考が公刊された1979年の差にも留意するべきであろう。1950年代の段階では, ウルク遺跡の聖域で神殿群が発掘され, 絵文字的な楔形文字の記された粘土板が大量に見つかり始めていた。しかし, 街を囲む城壁や詳細な市街地に関する情報は未入手であり, 比較し得るほかの都市や準都市級の街も未発見であった。その後30年の間, メソポタミア周辺で多くの調査成果が集

1 ビータックは, エジプトの都市化論の末尾にて, 当時のエジプト学の現状に憂慮しており, 発掘現場で土層断面を適切に識別できる考古学者の育成が急務であると訴えている(Bietak 1979: 140)。とくに, 実戦で役に立つ学生を大学で教育する必要性を強調しており, いつの時代にも現場を仕切れる程度の経験と技量が若手には求められていたようだ。

積されたおかげで、防御施設としての城壁、市街地における住み分けや異出自の共存、他の拠点集落との優劣関係などが浮き彫りになってきたのである。学史を振り返れば、両者の焦点がずれているのはごく自然であることに気付く。

なお、川西はビータックの9箇条はつまるところ権力に帰着すると見ている。先に触れた通り、どうやらビータックはチャイルドとは異なる方向を目指していたようで、国家や権力を意識した演繹的なアプローチをしていたといえる。そこには、1960年代以降に流行ったプロセス学派（後述）の概念、すなわち仮説を立ててから個々のデータで検証していく、という方向性が透けて見える。この指向はチャイルドの積上げ式の論理展開と真逆である。

両者のアプローチは、それぞれの時代の調査成果と研究動向にもとづいた至極妥当な方法論であり、古代都市の定義に関してどちらが適切かという問い自体にはあまり有効性を見出せない。言い換えると、モノの集積である文化を切り口にして社会進化の到達した都市段階を描写しようとしたのがチャイルド、権力の存在を仮定して都市の国家的な性質を検証しようとしたのがビータックとなろう。

1.3. チャイルド以降の「都市＝文明」論

西アジアの都市研究において、考古学とならび不可欠の分野がアッシリア学である²。古代西アジアでは、いち早くメソポタミア地方で文字記録システムが発明された。最古の文字体系は、絵文字的な記号（サイン）から構成されており、話し言葉としてのシュメール語が文字化されたものである。西アジアの古代史研究は、19世紀中頃よりアッシリア学を主体とする文献史学が先行して、20世紀のバビロン遺跡発掘前後から科学的な考古学がようやく始まっていった。

当初の考古学的活動は、文献史学の基本史料となる粘土板文書を提供するための補助学問という意味合いが強かった。しだいに、文字のない古い時代、いわゆる先史時代の文化が都市遺跡などの調査において露呈していき、遺構・遺物を基本資料とする先史考古学が独り立ちして行く。

先史考古学に軸足を乗せていたチャイルドは、多くの考古学者と同様に、文献史学の研究成果である「文字記録システム」そのものを、考古学的な都市の定義に盛り込んでいた。彼は都市革命論において次のように述べている（Childe 1950: 3-4）：

「語源的にこの言葉（文明）は「都市」に関連しており、都市生活がこの（文明）段階に始まったことは確かである。しかし、「都市」そのものはあいまいなので、考古学者は文明の定義として好んで「文字記録」を使う。（中略）都市が造られたところではいずこでも、読み書きのできない農民の村が以前から存続していた（すでに文明化された人々が新たに開拓した居住地は別にして）。いつ、どこで興った文明であっても、未開段階と完全に決別したわけではないのだ。」

チャイルドは、文化変化の拠り所を、モルガン-エンゲルスの「野蛮」「未開」「文明」という段階的な社会発展

2 古代文字の研究の歴史は古く、およそ400年前にヨーロッパ世界に粘土板文書資料が持ち込まれ、200年前までには本格的な解読ブームが起きて、約150年前にベルセポリス碑文の3言語併記で記された古代文字すべてが解読された。この1857年に解読された3番目の古代文字が当時「アッシリア語」とされていたので、西アジアの古代文字全般を研究する分野は、伝統的にアッシリア学と呼ばれてきている。

説に置いていたので、社会の発展階梯において都市は「文明」段階に位置するとしていた。彼は、「文明」段階に初現した都市を考古学的に定義することで、逆にほんやりとした「文明」の輪郭を把握できるようになると考えていた。つまり、彼の都市の定義において文字記録は必須であった。同時に、「文明」になっても読み書きのできない「未開」の要素は引きずられており、都市を支える農村はいぜんとして存続していた、とチャイルドは鋭く言及している。

チャイルド以降の都市研究では、文明と都市がほぼ同義的に解釈されていったようで、おもに比較文明論の脈略で「都市＝文明」論が展開されていくことになる。ただし、都市の定義はチャイルドほど厳密ではなくなり、簡略化されていった。たとえば、インダス考古学の M. ウィーラーは、文明の定義を2つの条件に集約して発表しており (Wheeler 1956: 132)、アフリカ考古学の G. コナーが自著にてその箇所を引用している (コナー 1993: 18-19) :

- ①通常の食料生産活動から解放された専門家を養うに足る規模を持つ定住集団、
- ②組織化された永続的な統治の存在を示す公共事業と公共需要。

コナーが指摘している通り、ウィーラーの定義している文明とは都市そのものを意味している。ウィーラーはインダス地方に栄えたハラッパー文化 (インダス文明) の専門家であり、モヘンジョダロやハラッパーといった都市遺跡を発掘している。ただ、インダスでは絵文字が出土しているものの、ほとんど解読されていない故だろうか、文明の定義として定番の「文字」には慎重な態度を示している。このあたりがチャイルドの都市観と大きく異なる点でもある。誌上にてウィーラーは、「文字は文明生活の派生的な発明である」とも述べている³ (Wheeler 1956: 132)。

なお、チャイルドとほぼ同世代の研究者として、経済史家 K. ウィットフォーゲルもいる。ウィットフォーゲルは自然資源としての水の重要性を説き、大規模な灌漑設備が官僚制を発達させたと主張した (Wittfogel 1957)。古代中国やメソポタミアのように、降水量の少ない地域を豊饒な地に変えるには、水を確保するための大規模な灌漑事業を立ち上げて、中央集権的な国家がつねに調整・管理していく必要があったというのだ。彼はこうした大規模な灌漑事業に依存する社会を「治水社会 hydraulic society」と呼び、そうした社会を維持する独裁的な中央集権政治を「東洋的専制政治 oriental despotism」と命名した。そして、水資源の管理者は、交易、工芸品生産、富などの管理者にもなり得たという。

「東洋的専制政治」に対して批判はあるものの、自然環境への適応手段として人間社会がどのような技術を考案して、いかにして社会構造が変質していったのかという方向性についてはある程度参考になる。おそらく、当初メソポタミアでは、小規模な灌漑設備を維持するのは集落の協働組織で間に合っていた。しだいに、人口増加により灌漑の需要が高まり、灌漑システムが拡大すると同時に、それを維持するために組織自体が効率の良い管理体制へと改良されていった。ついには、中央集権化していった政治組織が、大規模な灌漑設備の造営に着手して

3 チャイルドは、掲載誌 *Antiquity* の翌号の覚書きにて、ウィーラーらの用語を別段気にも留めずにそのまま掲載してしまった編集者を批判している (Childe 1957: 36)。普段は冷静なチャイルドがこれだけ不快感を示しているのは珍しい。そして、1957年10月、チャイルドは故郷のオーストラリアで帰らぬ人となる。晩年は、自身の老いと社会的貢献のはざまに悩んでいたようで、知己には自殺をほのめかしていたらしい。精神的に不安定な心中を察すると、編集者にキレてしまったチャイルドには同情したくなる。死後、彼の遺稿である「Retrospect」が同じく *Antiquity* 誌に掲載されている。

いった。このように相互影響的な展開の脈絡で読み直すと、ウィットフォーゲルの仮説は理解しやすくなる。

チャイルド没後になるが、アメリカ人類学の K. クラックホーンはさらに簡潔な定義を提言している。彼によると、「ある社会が少なくとも以下のうちの二つ、つまりざっと5,000人以上の住民を擁する町、文字、記念物的祭祀中心のうちの二つを持っていれば文明化されていると見てよい」としている (Kluckhohn 1960: 400; コナー 1993: 19)。ここまでくるとかなり大雑把な都市の定義となり、メソポタミアやインダスといったそれぞれの地域における都市化議論に耐えられそうにない。比較都市論としては有効な設定であるが、個別の都市を議論するにはいささか心もとない。

以上のように、チャイルド以降の都市の定義は簡略化の道を辿っていった。同時に、「文明」という用語の指す実態があいまいなため、「都市=文明」論がしぼんでいく。代わりに台頭してきたのが、「都市=国家」論である。先に触れたように、チャイルド自身は国家よりも都市にこだわっていたと見受けられるのに対して、1960年代頃からは「都市=国家」を機軸とした国家形成論が展開していくことになる。

2. セトルメントパターン研究

2.1. プロセス考古学の台頭

チャイルドと並んで、西アジア都市研究の先駆者として不動の名声を博しているのが R. McC. アダムズである。アダムズのあたりから、「都市化」が「国家形成」へと引き寄せられて議論されていく傾向になる。まず、彼の活躍し始めた頃の研究背景を整理しておく。

チャイルドの絶頂期である1950年代前後、アメリカ人類学界では先の単系進化論とは異なる多系進化論（新進化主義）が登場しつつあった。進化論そのものは、19世紀に不信を買ってからは敬遠されたままであった。代わりに20世紀初頭のアメリカでは、人類学の父 F. ボアズにより型式分類と記述が徹底されていた。このボアズの「歴史個別主義」に対する反動として、人類進歩の概念から切り離して、文化進化を説明しようという新たな主義の進化論が現れた。

新進化主義の中心的人物が、L. ホワイトと J. スチュワードである。ホワイトはすべての文化は技術的發展にもとづき、同じような段階順に進化していくと主張した。他方、スチュワードは自然環境こそが文化変化の要因であり、似たような環境下では特定の文化は同じような発展の足跡をたどると説いた。つまり、前者は文化進化の普遍性、後者は環境による文化の多様性を唱えたのである。

1960年代初頭には、ホワイトの「一般進化」とスチュワードの「特殊進化」がアメリカ人類学の M. サーリンズと E. サーヴィスによって融合されて、「バンド」「部族」「首長制社会」「未開国家」（および産業社会）という段階的な社会進化論が提唱されることになる。この社会進化論は、現代の民族誌資料の集積により人間の社会組織を4（5）段階に区分して、古代あるいは現代を問わず技術的により高度な社会は、より優れた選択的な適性に恵まれている（より多様化する）と仮定していた (Service 1962)。

ほぼ同時期に、M. フリードが「平等主義社会」「地位社会」「階層化社会」「国家」という別の段階的な社会進化説を提示している (Fried 1967)。こちらの発展段階説は、共同体における構成員の社会的な地位がどのように変化していくのかという視点に立っている。彼の主張によると、サーヴィスの唱える首長制から未開国家への移行に関して、後者の出現以前にすでに階層化が始まっており、むしろ階層の秩序を維持するために国家が形成さ

れていったという (Yoffee 2005: 14)。

このようにして、民族誌資料にもとづいた段階的に社会が発展するという人類学における考え方が、欧米の考古学界に広く浸透していった。とくに、北米の研究者でこの傾向が強く、人類学＝考古学界で段階的な社会進化論が広く支持されていった。その背景には、考古学を歴史学の一分野とする伝統が根強いヨーロッパに比べて、アメリカでの考古学は広義の人類学の一分野として位置づけられているといった学問的土壌の違いも強く作用していた⁴。

1960年代には、この人類学界における新進化主義の潮流のもとで、R. ビンフォードを旗手とする若手の研究者集団が台頭していった。当時は、長引くベトナム戦争をめぐる厭戦気運と相まって、世界的に論争と社会不安の時代に入っていた。世界動向に同調するように、60年代のアメリカ考古学界も、長らく続いてきた保守的な手法、すなわち遺物の型式分類と記述による文化編年に甘んじていた状況に対して、若手研究者の間で不安と不満が噴出し始めていた。そこへ劇的な変革が起きたのである。

当時、考古学における真新しい主義主張は「ニューアーケオロジー New Archaeology」と呼ばれていたが、1970年代になってからはもはや新しくなくなったので、「プロセス考古学」として認知されるようになった。プロセス考古学とは、かなり平たく言うと、文化変化の過程（プロセス）に一般法則性を求める学問的な姿勢を指している。

まず、一般的に疑われずにきた文化的影響などの概念を徹底的に検証するところから始まった。その手続として、一般理論にもとづいた仮説を立てて、考古資料を数量化しながら演繹的に検証していく（仮説演繹法）。プロセス考古学にとっての文化とは、技術・社会・イデオロギーの諸領域（サブシステム）から構成された「閉じた」体系（システム）であり、各サブシステムは相互に関連し合いながら全体の文化システムを構成している。文化システムは平衡状態を維持する傾向があるので、外部の自然環境あるいは別系統の文化システムの変動に影響される。その適応の結果として、各サブシステムや全体の文化システムが変化していくと見なされた。こうした有機的なシステムや適応と変化の痕跡は、考古資料に直接見える状態では残されていない。

そこで、考古資料の変異パターンを適切に読み取る支援概念が1970年代に新たに導入された。考古資料は静止した状態にある（何も語ってくれない）ため、直接観察することのできない過去の人間行動のパターンに読み替える作業が必要になる。ビンフォードによると、「静的な資料の観察から動的な原因の解釈へ正確に変換してくれる「ロゼッタ・ストーン」を探す」(Binford 1983: 24) 必要があった。仮説演繹法の限界を超えるべく、彼は民族考古学の研究成果にもとづいて、ミドルレンジセオリー（中範囲理論）という概念を援用した。つまり、考古資料と人間行動のギャップを埋める方法論を導入したのである。

このようにして、過去の人間行動の脈絡で解釈し直された考古資料の変異パターンは、文化システムの一般法則的な変化プロセスとして語られるようになった。なぜ文化が変化したのかを科学的に実証しようとしたのがプロセス考古学である⁵。

4 この差は、欧米間の大学における考古学科の編成を見比べても明白であり、アメリカでは広義の人類学のなかに文化人類学と考古学が含まれる。本稿で使っている「人類学」は、ほぼ文化人類学に相当し、アメリカの考古学者はたいてい人類学的考古学 anthropological archaeology に帰属する。

5 自然科学と歴史科学という違いこそあれ、ビンフォードとチャイルドの方法論には重なるところがあり、時代と場所を問わず慧眼の目指していた先は驚くほど近似している。

2.2. アダムズによるサーヴェイ

アダムズは、ちょうどニューアーケオロジー運動がアメリカ考古学界に衝撃をもたらした渦中にいた。彼のメソポタミアの都市起源に関する論考は1960年に早々と発表されており、アダムズはすでに「都市形成プロセスには多様な要因の相互影響が絡んでいる」と述べている(Adams 1960: 157)。また、1966年の著書にて、彼はスチュワートの「文化コア cultural core」(環境から影響を受けやすい生態学的な適応手段や社会組織によって特徴づけられる文化類型)説を踏襲しながら、メソポタミアとメソアメリカの都市化における共通項を示唆している。

同著では、「(都市化の) おもな関心は国家の成長にある」と明言している(Adams 1966: 90)。アダムズは、文明という用語を意図的に避けて、スチュワートの環境と文化変化の因果律や、サービスの段階的な社会進化論に立脚しながら、メソポタミアの都市化プロセスを国家形成の一側面として捉えていた。このあたりから、西アジアのなかでもメソポタミアの都市化をめぐる議論は、「都市=文明」論から「都市=国家」論へと舵を切っていったと見受けられる。

アダムズ自身の調査地はイラクが中心であった。1950年代末以降、中部メソポタミアのディヤラ川流域におけるサーヴェイ(表採や試掘)に参加し、まもなく自ら大規模なサーヴェイをシュメール地方(南メソポタミアの南部)にて指揮することになった。結果として、アダムズは、人間の暮らしの基盤となる集落規模や分布傾向(セトルメントパターン)が時間の経過とともに変化するプロセスを補足することに成功した。

サーヴェイは一般調査とも呼ばれる。遺跡の発掘前に行う予備的なものもあれば、遺跡の分布調査を目的とするものもある。後者の場合、限られた景観を組織的に調査して、遺跡分布図や土地利用図を作成していく。遺跡の年代推定は、表採される土器をおもに使い、可能であれば、運河や水路、堤防や周壁、さらには生産活動で派生した残滓など、地形に残されているさまざまな遺構や特徴的な遺物の規模や性質に従って、遺跡を分類していく。このように複数の時期にまたがる遺跡の分布調査により、人間の景観利用についての全体的な研究、すなわちセトルメントパターン研究が可能となる。

セトルメントパターン研究そのものは、1960年代中頃の地理学者による統合的な研究からの影響を受けて、70年代より考古学者が本格的に取り組み始めた。セトルメントパターン研究は、プロセス考古学の方法論として導入されていき、山や川などに区切られた景観のなかで、人々がどのように自然環境に適応していったのかを追究していった。当初期のセトルメントパターン研究は、「セトルメント同士」の関係だけでなく、「人とセトルメント」の関係についての解明も目指していた。

メソポタミアでは、早くからユーフラテス水系およびティグリス水系にてサーヴェイが実施され、通時的な遺跡分布、土地利用、情報伝達、人口動態、都市と農村の流動・交流などの解明を目的としていた。その歴史は1930年代にまで遡る。M. マロワンによるシリアのハブール川流域を始めとして、S. ロイドによるイラクのシンジャール山麓域や、R. ブレイドウッドによるアムーク平原など、いくつかの広域サーヴェイが実施されていった。

とくに、1936~37年、アッシリア学の T. ジェイコブセンによるディヤラ川流域のサーヴェイは画期的であった。バグダッドの北東に位置するディヤラ川流域のすべての遺跡(テル)を踏査して、表採土器より遺跡の時期を推定しながら、時期別の地図上に各遺跡をプロットしていく。その結果、遺跡分布パターンは、古代の街や村が河川や運河に沿って立地していたことを明らかにしてくれた(Jacobsen 1995: 2746-7)。ただ、分布調査の成果報告は1965年まで公開されず、第二次世界大戦をはさんで、しばらく組織的な広域サーヴェイは停滞してしまった。

ようやく1957～58年に、アダムズ自らが指揮を執って、ディヤラ川流域の調査に再び取り組んだ。彼らの大規模なサーヴェイの背景には、荒れ果てた塩分の多いかつての耕地でふたたび農業を行うことは可能かどうかを調査して欲しい、という当時のイラク政府の意向があった。当初、ジェイコブセンがイラク政府から依頼を受けてサーヴェイに着手して、アダムズがその後を継ぐことになったのである。

アダムズのサーヴェイは、彼の同僚や学生たちで構成された調査隊により実施された。アダムズは航空写真を活用して、調査開始前に多くの古代の集落そのものだけでなく、古代の運河の跡をも確かめることができた。さらに彼は、1968～75年のサーヴェイにおいて、新たにランドサット衛星画像を導入した地理学的手法により、遺跡規模の階層化や遺跡間の序列関係を分析していった。アダムズは、サーヴェイ地域において10 ha を超える遺跡を都市、10 ha 以下の遺跡を非都市（村落）と二分している（Adams 1981: Table 4）。

分析によると、ウルク期前半（紀元前4千年紀前半）には、南メソポタミアの旧ユーフラテス水系に沿って多

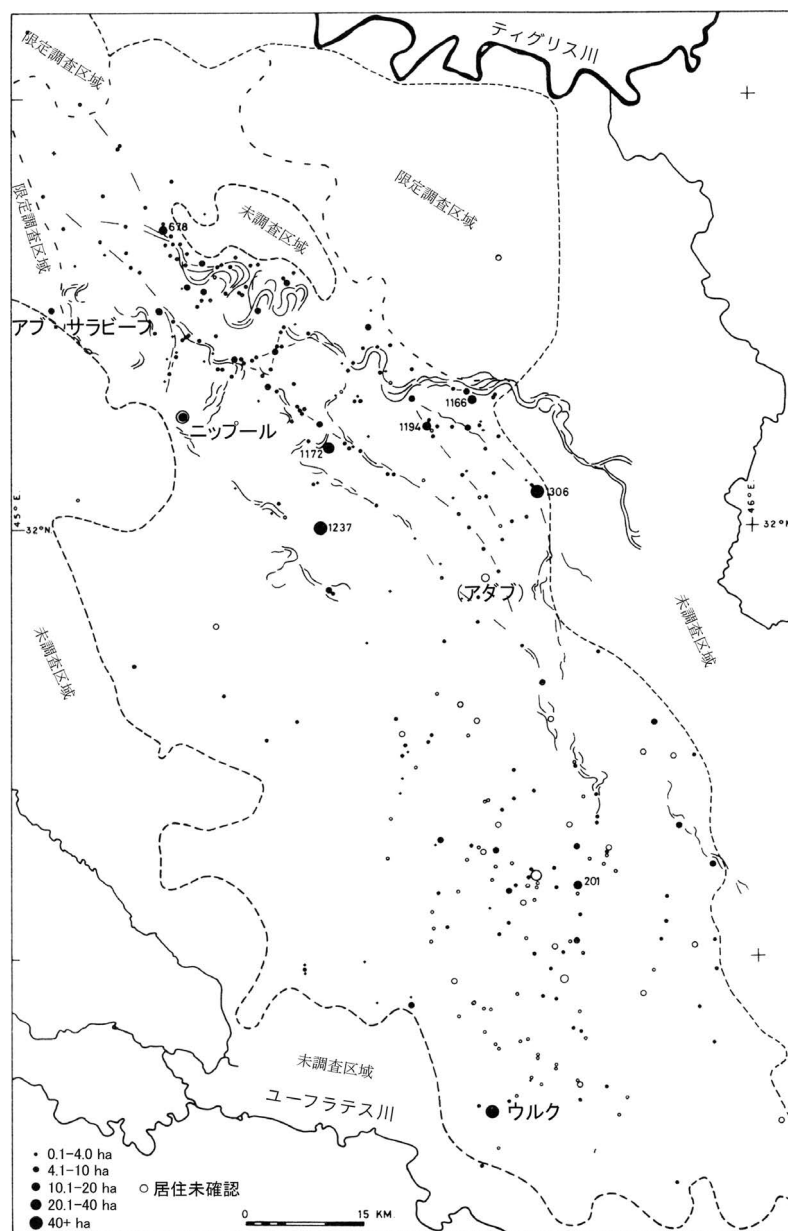


図2 ウルク前～中期のセトルメントパターン (Adams 1981: Fig. 13 より作成)

くの小集落が散開し、その中でいくつかの大規模集落が中心的な位置を占めていたことがわかった（図2）。そして、ウルク後期（紀元前4千年紀後半）には、ますます大型化する大規模集落のもとに、周辺の小集落から人口が流入していった様子も明らかにされた（図3）。都市と村落の二極化が進行していったというのである。とくに、アダムズは、シュメール地方のニップール・アダブ地域を通っていた旧ユーフラテス川の流路が変更した結果、同地域の村落が放棄されて、バシラ湾に近いウルク遺跡周辺（シュメール地方南部）へ人口が流入していったと想定した。

アダムズの最大の功績は、シュメール地方の広域サーヴェイにもとづいて、遺跡規模や遺跡同士の序列関係を定量的に分析したセトルメントパターンの復原にあったといえる。ウルク後期において、ニップール・アダブ地域の村落で人口が減少した代わりに、ウルク遺跡自体の人口が増加していった、というシュメール地方における人口動態の推移を想定した。そして、この都市化の主要因は、ユーフラテス川の流路変更の後押しされたシュメー

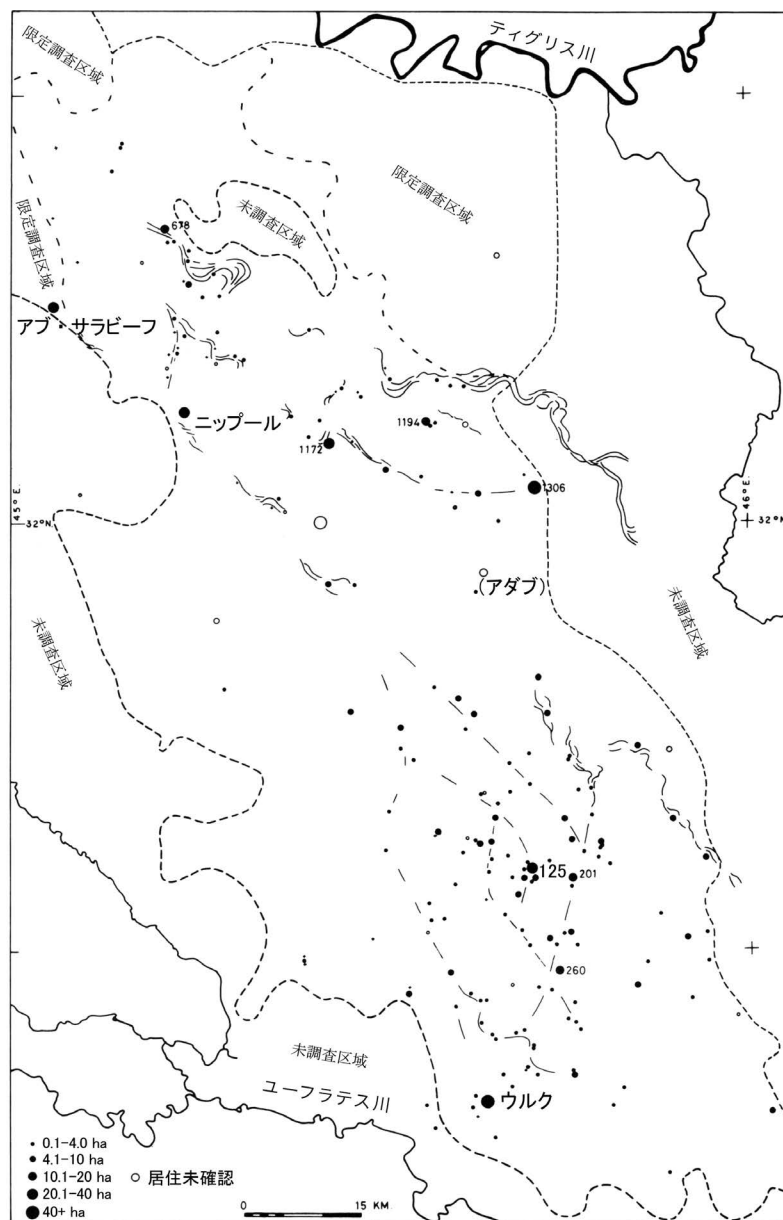


図3 ウルク後期のセトルメントパターン (Adams 1981: Fig. 12 より作成)

ル地方南部（ウルク遺跡周辺）への人口移動にこそ求められる、という作業仮説を得るに至った（Adams 1981: 252）。

さらにアダムズによると、ウルク遺跡では、紀元前3千年紀初頭の初期王朝時代Ⅰ期になるとウルク後期の2倍にまで人口が急増して、類を見ない支配的な都市に発展した。尋常でない人口増加の理由として、紀元前5500～3000年頃に降水量が増加した（いわゆる気候最適期に相当）後に、紀元前500年頃にかけて降水量が徐々に減っていったという環境変動に注目している。つまり、約5000年前のウルク遺跡における人口急増は、降水量の減少により灌漑用水の確保をめぐる競合が激しくなった状況と符合するという（Adams 1981: 90-94）。

アダムズは、あえて明言は避けているものの、この初期王朝時代Ⅰ期の段階がまさに国家の出現となる。自然環境の変動に影響されながら、都市化プロセスの達成点として国家が誕生したというシナリオが描かれている。彼のセトルメントパターン研究は、プロセス考古学的方法論と実地調査（サーヴェイ）が整合した幸運な例といえる。こうした研究成果により、都市化を国家形成として捉える「都市＝国家」論の下地ができあがっていったが、そこには問題点も内包されている。

2.3. サーヴェイの問題点

一般的に、サーヴェイにおいて、最も新しい時期（最上層）の居住範囲は、テルの表面に散らばる最も新しい時期の土器の分布により推定できる。他方、より古い時期（もっと下層）の居住範囲の把握はかなり難しい。そこでアダムズは、粘土採集、建物の建替えに伴う整地、墓壙の掘削などにより、当時の生活面にはさらに古い時期の土器片がつねに掘り返されていた、という仮説を立てた。そして、各時期の指標となる特徴的な土器片などを表採することで、時期ごとの居住利用を復原することができると考えた。そこには、反証になる明白な事例がなければ、下層における居住利用の最大範囲は、最上層におけるそれとほぼ重なるという想定もあった。こうした込み入った假定条件のもとで、アダムズのセトルメントパターン研究は成り立っている（Adams 1966: 122）。

ここで、いくつかの点に留意しなければならない。まず、アダムズに限らず、メソポタミアにおけるサーヴェイ全般に共通する問題は、各時期の示準遺物の認定がどこまで厳密なのかという点である。メソポタミアの都市形成期の考古学的研究が続けてきているJ. オーツは、いくつかの重要な指摘をしている。彼女によると、北メソポタミアのサーヴェイで確認されている土器に関して、ウルク後期として報告されている土器群には、ウルク中期のものが圧倒的に多く含まれてしまっていて、ウルク後期自体の土器はごくわずかしかなしいとしている。また、ウルク後期に後続するジェムデット・ナスル期の土器が「ウルク土器」として誤認されやすいという（Oates forthcoming: 10-11）。つまり、ウルク後期の土器型式の定義が不完全なために、前後の時期の土器群と混同されがちであるのだ。

つぎに、アダムズ自身も認めているように、ウルク土器の時期分類が不十分なままで敷衍されてしまっている。表採土器の時期分類一覧では、「ウルク期前半タイプ Erlier Uruk Types」と「ウルク期後半タイプ Later Uruk Types」に二分されている（Adams 1981: 119-126, Table 10）。後者の該当土器を良く調べてみると、ウルク中期からウルク後期にかけて頻出すると記されているものが結構多い（図4）。つまり、居住利用の時期指定の根拠として用いている特徴的な土器タイプ群のなかには、特定の時期に限定されたものだけでなく、複数の時期にまたがったものも混在したままなのである。

土器タイプの時期については、すでに発掘されていたウルク遺跡の層位情報に基づいている。アダムズの共同

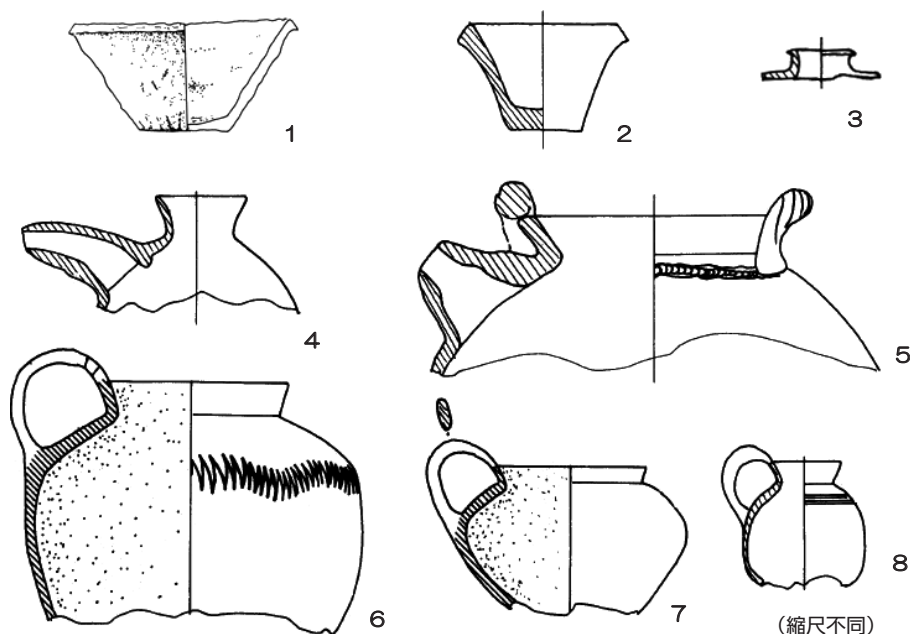


図4 ウルク中～後期の土器

1 外傾面取口縁鉢 (Adams 1981: Fig. 3-f), 2 外傾面取口縁鉢 (Adams and Nissen 1972: Fig. 47-1), 3 罎付壺 (ibid. Fig. 61-13), 4 下垂注口壺 (ibid. Fig. 44-6), 5 短注口両把手壺 (ibid. Fig. 45-1), 6 ループ状把手壺 (ibid. Fig. 41-16), 7 ループ状把手壺 (ibid. Fig. 41-21), 8 ループ状把手壺 (ibid. Fig. 44-163 b-3)

研究者であった H. ニッセンによると、ウルク遺跡のエアンナ地区第 XIV～VIII/VII 層が「ウルク期前半」、第 VII～IV 層が「ウルク期後半」と比定されている (Adams and Nissen 1972: 100)。「ウルク期後半」の示準土器は粗製の外傾面取口縁鉢 (Beveled-rim bowls: BRB) とされ、このタイプがおもに出土する層位幅がウルク後期という議論の出発点になってきた。ただ、近年の再検証では、外傾面取口縁鉢は第 IX 層より大量生産され始めていたことが確認され、ウルク中期からウルク後期にかけて頻出していたと見なされている (Sürenhagen 1986: 8)。

ここで、ウルク遺跡周辺においてサーヴェイで確認された No. 125 遺跡を例に検証してみる (図 3)。アダムズの時期ごとの居住利用面積の推移一覧表 (Table 7) によると、この遺跡はウルク中期における居住利用面積は不明であったが、ウルク後期に面積は 24 ha に急増し、ジェムデット・ナスル期には 18 ha、初期王朝時代 I 期には 10 ha 前後に減少するとされている。

ところが、ウルク期およびジェムデット・ナスル期の表採土器の器種組成一覧表および土器分類にもとづくウルク期遺跡の時期指定制一覧表 (Tables 9, 10) を吟味すると、No. 125 で採取されたウルク土器片 72 点のうち、「ウルク期後半」に帰属するとされる土器型式は、外傾面取口縁鉢 (Type AC: BRB) が 9 点 (13%)、小型球状壺 (Type CD: Small globular jars with short vertical or slightly flaring rims) が 8 点 (11%) であるのに対して、「ウルク期前半」に帰属するとされる外反口縁壺 (Type CC: Thin outflaring or outcurling jar rims) が 17 点 (24%) も出土している。

こうした数字から見てくるのは、「ウルク期前半」の段階においてすでに No. 125 では居住利用が始まっていたという見通しである。ところが、先述の一覧表 (Table 7) では、なぜかウルク前期の居住利用については触れられていない。また、ウルク遺跡周辺で「ウルク期前半」に居住利用が始まっていた可能性は、近隣の Nos. 126, 128 遺跡でも同様に認められる。さらに、No. 125 において、表で示された 20 数点のウルク中～後期の土器片だけ

で、20 ha を越えるウルク後期の居住利用面積を推定して大丈夫なのだろうかという素朴な疑問も生じる。

これらを勘案すると、アダムズの研究成果は部分的に修正するべきであろう。彼のセトルメントパターン研究は、ウルク前期～中期のニップール・アダブ地域（シュメール地方北部）に多数あった村落が放棄されて、大量の人口がウルク後期にウルク遺跡周辺（シュメール地方南部）へ流入していった、という論旨である。ただし、時期変遷の基準となる土器分類が不十分なまま、遺跡の居住時期を措定するには無理がある。上述した諸点から類推すると、すでにウルク中期の頃には、ある程度の人口がウルク遺跡周辺に凝集していた可能性が出てくる。

たしかに、ウルク後期（紀元前 4 千年紀後半）にニップール・アダブ地域の人口が減少したのは、アダムズの指摘の通りであると推定される⁶。プロセス考古学的な解釈をするならば、シュメール地方という閉じた体系のなかで、片方で減った分が他方に移住して、全体的な人口バランスが維持されることになる。しかし、飛出した人口がそのままウルク遺跡周辺へ流れ込んだのかは未検証である。ニップール・アダブ地域からの移住によりウルク遺跡周辺の人口が急増したというよりも、先行期からすでに後者では人口が順次増加していて、その累積結果としてウルク後期の都市誕生段階には突出した人口規模に成長した、と捉えなおすのが無難である。

3. 社会の複雑化と国家形成論

3.1. 社会の複雑化

前節で整理したように、1960年代に「都市＝文明」論が「都市＝国家」論へと変貌していった。アダムズ以降、多くの考古学者は、メソポタミアを中心とした西アジア地域の都市化について、国家形成という目線で論じていくことになる。1970年代になると、考古学における国家形成論は、現代の民族誌資料にもとづく人類学的な社会進化論から投影された「社会の複雑化」という潮流に導かれていった。

現状において、いつ頃から社会の複雑化が始まったのかという問いに対しては、定住生活を選択したあたりからという見解が支持されているように見受けられる⁷。やがて、西アジアの中心に位置するメソポタミア周辺地域で、ウバイド期からウルク期（紀元前 5 ～ 4 千年紀）にかけて社会の複雑化が本格的に進行していき、ついには都市の出現へとつながっていく。

このウバイド期からウルク期にかけての長期間が都市化（本節で解説している国家形成期）に相当する。他の地域の追従を許さない、通時的に層の厚い文化変化や地理的に広大なフィールドといった恵まれた研究環境のおかげで、メソポタミア周辺地域では多彩な「複雑化」が追究されてきている（Matthews 2003: 93）。その基層にあったのが、前節で紹介したサーヴィスによる段階的な社会進化論（バンド、部族、首長制社会、未開国家）である。

段階的な社会進化論は、時間軸において「単純から複雑へ」を変遷原理としている。たいていの場合、メソポタミアを中心とした西アジア地域における近年の都市化議論は、こういった人類学的な社会進化論の流れに乗っ

6 この見解は S. ポロックによるアダムズの研究成果の再検討と異なる（Pollock 2001）。ポロックは、南メソポタミアのウルク期において単元的な社会の存在は認められず、むしろニップール・アダブ地域とウルク遺跡周辺の間には大きな違いが認められるとしている。彼女の検証によると、人口の推移および集落立地の継続性においてニップール・アダブ地域はウルク期を通して安定していた。それに対して、南方のウルク遺跡周辺では、人口推移と集落立地において移ろいやすい環境にあり、その原因としてウルク遺跡そのものの特異な成長と、増えてきた人口を維持管理するための抑制的な手段（貢納など）を想定している（Pollock 2001: 217-221）。

7 たとえば、メソポタミアの北縁に位置する、トルコのハラフ・チェミヤギョベックリ・テベといった遺跡の発掘調査により、早々と複雑化した社会構造の事例が報告されている。

ている。複雑化した社会とは、もともと現代の民族誌資料にもとづいて人類学的に定義された概念であり、「首長制社会」と「国家」をめぐる議論は過去数十年にわたって重ねられてきている。つまり、遺跡の発掘調査で得られた資料を扱う考古学は、先史社会の解釈に隣接分野の研究成果を借用する構図になっている。そして、西アジアをフィールドとする「社会の複雑化」研究は、北米の人類学＝考古学界の主導により展開していくことになった。

西アジアのフィールドで、プロセス考古学的手法を実践した先駆けとして、1970年代初頭、複雑な社会の生態系（エコシステム）に注目した K. フラナリーの論考がある（Flannery 1972: 421-424）。彼は、メソアメリカのマヤ文明におけるセトルメントパターン研究などをもとに、通文化的なモデル構築を目指した。フラナリーによると、人間社会の生態系とは、階層的に配列された要素あるいはサブシステムによって構成された適応手段のことであり、社会的ストレスや環境的ストレスの負荷が高まると、それら諸要素やサブシステムの関係が変動していくことになる。そして、その複雑化の度合いが極まると、こうした体系内の情報処理や拡散の必要に迫られて、中央における行政的な管理やいわゆる官僚制などの支配体制が展開していった、という論法である。

フラナリーのあたりから、複雑化した社会や初期国家の研究は、社会構造や統治体系の分析により進められていく傾向が強くなっていくようだ。社会の複雑化あるいは国家形成の動因としては、環境変動、人口圧、技術発展、社会制度やイデオロギーの変化などが想定されていた。つまり、プロセス考古学における文化システムを構成するサブシステムやそれらを取りまく環境などが、国家形成の第一要因の候補として注目されたのである。1970年代以降、こうした北米を発信源とする国家形成論が西アジアにおける都市化研究にも着実に波及していき、社会変化の主要因を追究する議論は時代の推移とともに少しずつ変化していった。

3.2. 人口圧による社会変化

国家形成の原因として、人口圧が引き金になった紛争や戦争を想定する見方がある。紛争や戦争の仕組みに刺激されて、強力な行政組織が成長していったというものだ。たいていは、継続した人口増加が新たな食糧生産手段をもたらすという E. ボスラップの人口圧論に依拠している（Boserup 1965）。代表的な例として、アメリカの人類学者 R. L. カーネイロの説がある。彼は南アメリカのアマゾンやベルーにおける事例をもとに、古代の紛争や戦争が国家形成の動因になったという仮説を立て、自説を西アジアにも適用した（Carneiro 1970: 736-738）。

カーネイロの「制約説 Circumscription Theory」によると、初期国家へと至る社会はいずれも、山、海、沙漠などの自然環境によって制限された農耕地によって成り立っていた。限られた土地利用において、人々は新たに農地を開拓することが難しいため、むしろ既存の農地を奪う方向へと進んでいった。すなわち、地理的に制約された地域では、人口圧の増加による食糧資源の不足を補うために、限られた農耕地の獲得をめぐる近隣地域と紛争をおこすようになったのである。そして、争いに勝った軍事指導者は、多くの可耕地を報酬として得ただけでなく、負けた側の集団を社会的に低階層の労働力として支配していった。こうした階層化プロセスをへて、中央集権的な国家組織が形成されていったという。

ウィットフォーゲル同様に、カーネイロは環境に根ざした人口増加への対処という目線で社会変化を捉えようとしていた。社会変化のプロセスとして、前者は食糧生産手段としての灌漑施設の拡大が組織の中央集権化を促し、後者は紛争の拡大により階層化が進展していったと考えていたのである。カーネイロは、領土拡大により国家は成長して、戦争によって手に入れた富や社会的地位の格差が増大することにより、国家内部の階層化が進行していったと見ていた。

他の人口圧論として、アメリカの考古学者 M. ギブソンの論考がある。彼はナイジェリアの民族誌資料を参考にしながら、メソポタミアでは、流路変更や局地的な人口過剰の問題が慢性的に招来されたため、組織的な都市化プロセスが起きたと主張している。ユーフラテス川とティグリス川は流路を変更することがしばしばあり、流域で暮らす人々はずねに影響を受けていた。とくに、ユーフラテス川の流路が西方に移動することにより、東方（左岸）の支流域が枯渇してしまい、人々は西へ向かって移住していった。結果的に、ユーフラテス川流域の限られた居住可能な地域（ウルク、ニップール、キシュなど）で人口が過剰になる（cf. 図1）。ギブソンは、そうした人口圧の高まった空間でこそ、農耕の集約化、長距離交易の拡大化、社会組織の複雑化などが段階的に進展していったと説いている（Gibson 1973: 454）。

またギブソンは、一次的な都市と二次的な都市を区別している（Gibson 1973: 461-462）。メソポタミアでは、数千年間、ウバイド期からウルク期にかけて人口増加とともに社会の複雑化が進行していた。紀元前4千年紀後半のウルク後期になると、ユーフラテス川の流路変更に影響された東方支流域での居住地廃絶により、同流域の限られた居住地で局地的な人口集中が起こり、社会の複雑化が加速度的に進んでいった。その結果として、ジェムデット・ナスル期から初期王朝時代にかけてのわずか数百年の間に、一次的な都市（ウルク、ニップール、キシュなど）が誕生した、と彼は推定している。

ギブソンによると、初期王朝時代になった後で、二次的な都市（ウンマ、バビロン、エシュヌナなど）が、戦争や交易といった一次的な都市との競合的関係のなかで形成されていったという。彼は、一次的な都市の誕生は、ユーフラテス川に流路変更を遠因とした人口移動に原因があったのに対して、二次的な都市の出現は、複雑化した社会組織の台頭に原因があったとしている。前者はウルク後期における都市化の一面を描写しており、後者はジェムデット・ナスル期から初期王朝時代にかけての都市国家の出現に符合する。ギブソンは、実際のフィールドでの調査成果にもとづいて、都市化に照準を合わせた通時的な議論を展開しているため、彼の考古学的な説明は、同年代に繰り広げられた他の抽象的な国家形成論よりも理解しやすい。

3.3. 交易モデルと中心地理論

人口圧などの内的な要因ではなく、外部からの影響そのものにより文化や社会が変化していったという議論も続いてきた。まず、レンフリーューは、1960年代に西アジアの黒曜石の原産地同定を共同研究し、その成果も踏まえながらエーゲ海域などのヨーロッパにおける先史時代の文化変化に交易が大きな役割を果たしたと説いた（Renfrew 1969）。彼は、長らくヨーロッパの先史学界に浸透していた伝播論に疑問を投げかけて、先史社会の変化要因の一つとして交易の役割に注視した。レンフリーューの仮説については常木晃が詳細に紹介している（常木 1990: 197-199）。常木によると、基本的な資料操作や拙速気味の分析手法などが批判の対象となっているものの、レンフリーューはきたるべき考古学的な交換研究の嚆矢として重要な切掛けをつくったという点で評価されるという。

70年代になると、人類学界の交換研究に刺激されて、考古学界でも交換や交易の研究が興隆していった（常木 1991: 178）。当時、科学技術分野の進展に後押しされて、さまざまな理化学的な分析方法が考古学の分野にも援用された。先の黒曜石の産地同定で利用した微量元素分析をはじめとして、都市化前後の時期に広く分布していた彩文土器の中性子放射化分析など、多様な分析成果により遺物の生産地をたどることが可能になる。考古学者は、先史時代における考古資料の空間的な分布の説明に、着実に進歩していた理化学的な分析を盛り込んで、ときには民族誌資料も参照しながら説明を試みていった。

同年代に開催された、交易と交換をテーマとしたいいくつかの国際シンポジウム等には、交換・交易研究への関心度の高さが表われている。たとえば、1973年にアメリカのサンタフェで開催された SAR (School of American Research) のセミナーでは、おもに先史時代の交換・交易と国家形成について議論された (Sabloff and Lamberg-Karlovsky (eds.) 1975)。他に、1976年にイギリスのバーミンガム大学で開催された国際アッシリア学会では、メソポタミア周辺における歴史時代の交易と文明・経済の広がりについて議論された (Hawkins (ed.) 1977)。

前者のセミナーでは、西アジアの都市化に関連した議論がいくつか盛り込まれている。収録集の冒頭でレンフリーは、上述のプロセス考古学的な要素、すなわち環境変動、人口圧、技術発展、社会制度やイデオロギーの変化に加えて、対外交易も都市形成の主要因であるとし、10種類の「交換モード」を提唱している。同説を紹介している常木は、交換モードで提示された諸類型は考古学上の遺物の分布パターンに符合しきれておらず、レンフリーの交換類型は考古学化されていないと評している (常木 1991: 181-185)。たしかに、レンフリーの議論は開発途上ではあったものの、複雑化していく先史社会の変化要因として、移住や伝播に代わる交換や交易といった斬新な切り口で捉えようとした点は学史的に意義があったといえる。

また70年代には、地理学の方法論である中心地理論 (central place theory) により、南メソポタミアでのサーヴェイ成果が地理学モデルで説明されていった。もともと同理論は、1930年代にドイツの地理学者 W. クリスタラーなどによって開発されたもので、現代の南ドイツにおける街や都市の空間分布や機能についての説明モデルであった。クリスタラーによると、均質な景観的環境のもとでは、同様な規模・性質のセンター (中心地) あるいはセトルメント (街や都市) は互いに等間隔に配置され、その周囲にはさらに小規模の衛星都市を伴った二次的なセンターが配置されて、それぞれのセンターによって支配されている領域は正六角形を呈する (Renfrew and Bahn 2000: 178-179; 酒井 1990: 21)。

中心地理論をいち早く西アジア考古学の都市化研究に応用したのは、G. ジョンソンである (Johnson 1975)。彼は、南西イランのスシアナ平原で自ら行ったサーヴェイ成果と、南メソポタミアのウルク遺跡周辺において上述のアダムズらによるサーヴェイで得られたセトルメントパターンを比較分析した。その結果、スシアナ平原のウルク中期頃とウルク遺跡周辺のウルク後期は、それぞれのセトルメントパターンの傾向が驚くほど類似していることが明らかにされた。彼によると、両地域のセトルメントは、遺跡の規模にもとづいて4段階の階層 (大センター、小センター、大村落、小村落) に分けられて、これらの遺跡の分布は中心地モデルに整合したパターンを示すという (図5)。

さらにジョンソンは、こうした中心地モデルに適合するセトルメントパターンの解釈において、遺跡の規模に関わらず、円錐状の土製コーンが表面採集された小規模の遺跡にも注目している。一般的に、西アジアのウルク期において、土製コーンは神殿や公共施設の壁面にモザイク装飾として使われている (図6)。そこで彼は、こうした特徴的な遺物こそが、行政的な役割を果たしていた証拠であると考えた。とくに、ウルク遺跡周辺で土製コーンの出土した村落遺跡群は、大センターとの距離は平均して 10 km 圏内に収まっている。つまり、ウルク遺跡などのいくつかの大センターが中心地となり、行政的な機能を示唆する土製コーンの出土した村落がほぼ等間隔に配置されているのである。ジョンソンは、ウルク遺跡周辺において、複数の大センターを中心地とした地域内交換ネットワークが特定の小規模遺跡を結節点として機能していたと推定した (図5)。

ウルク遺跡の周辺地域は、中心地モデルの検証に理想的なセトルメントパターンを呈していたようだ。ジョンソンのセトルメントパターン解釈で鍵になるのが土製コーンの分布である。たしかに、実際にウルク遺跡などで

発掘された事例を見ると、これらは神殿建築に多用されているため、土製コーンの分布自体は祭祀儀礼の拡がりを示唆してくれている。ところが、神殿には公共的な機能も付加されており、本来の祭祀儀礼の空間としてだけでなく、物流における場も創出されていたとジョンソンは仮定している。その根拠にあったと推察されるのが、いわゆる「神殿経済 Tempelwirtschaft」論という古典学説である。

もともと神殿経済論は、1920年代にドイツのアッシリア学者 A. ダイメルや A. シュナイダーらが提唱した学説である。シュメール地方（南メソポタミアの南部地域）にあるギルス（現代名テロー）遺跡のバウ神殿で見つかった約1600枚の粘土板文書には、神殿主導で行われていた各種取引、耕地・収穫物のリスト、専門工人の管理、穀物・家畜の受領や収益などが楔形文字で記されていた。彼らは、こうした初期王朝時代の文字史料に依拠して、シュメール都市国家の経済は神殿を中心に展開していたと類推したのである。この古典的な神殿経済論（シュメール古典学説）をめぐる議論の推移については、前川和也が端的にまとめている（前川 2010: 3-4）。

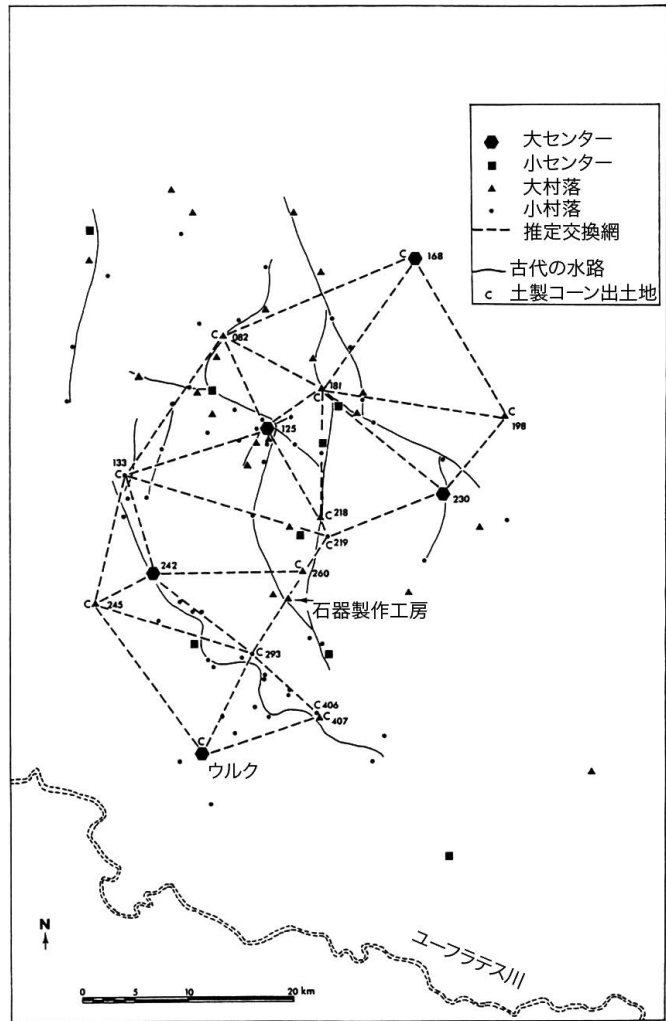


図5 ジョンソンの中心地モデル (Johnson 1975: Fig. 31 より作成)

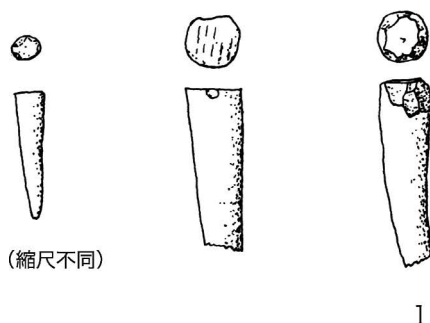


図6 土製コーンとモザイク装飾

1 土製コーン (Adams 1981: Fig. 6j, k, l), 2 モザイク装飾の復原想定図 (ウルク遺跡エアンナ地区, Roaf 1990: 62)



2

前川が評しているように、神殿経済論に対して1940年代以降さまざまな反論があり、今では学史上の古典学説になっているものの、隣接分野の考古学には異なる影響を及ぼしていったと見受けられる。相次いで、ウルク遺跡やエリドゥ遺跡で神殿が確認されたこともあり、初期王朝時代における神殿を軸とする経済構造が先史時代終盤のウルク期だけでなく、さらにはウバイド期にまで遡って類推されていった。しだいに、文献史学から提唱されたこの古典学説は、考古学側には暗黙のうちに史的事実と見なされていったようで、考古学的な批判や検証にさらされる機会が少なかったようだ (cf. Van De Mieroop 1997: 9)。つまり、神殿経済論が考古学者に潜在的に擦込まれていったために、突っ込んだ議論が展開してこなかった印象が強い。

1976年に開かれた国際アッシリア学会では、楔形文字史料にもとづいた都市国家間の交易や遠隔地との長距離交易などが議論された。そのなかで M. パウエルは、シュメールの商人たちに関する文書史料を用いて、紀元前3千年紀の経済は、神殿や宮殿の主導する大規模な国家的な経営だけでなく、商人たちが主役の市場経済的な形態をも含む多様な構造であったと主張している。ここで、考古学的調査の成果が体系的に整理されていれば、文献史学の見解に対して何らかの有意な応答もできたはずだが、管見ではその形跡は認められない。同学会を講評した N. ヨフィーも指摘している通り、考古学と文献史学との相補的な協力はほとんど現実化していなかった (Yoffee 1981: 26)。

70年代以降、西アジア考古学を先導してきた北米の人類学=考古学界において、大学での若手教育の段階で人類学系の考古学者とアッシリア学者の養成は別々に展開していった。E. ストーンが悲観的に指摘しているように、北米では両学系の若手が互いの素養を学ぶ場が教育段階から欠如してしまっているため、それぞれの専門家の有意な意見交換や議論が生まれてこない (Stone 2003: 186–189)。こうした状況は北米だけに限ったことではなく、いまだに続いているようだ。残念ながら現状では、文献史料にもとづいて歴史時代の都市（都市国家）から過去を振り返った初期都市像と (cf. Postgate 1992; Van De Mieroop 1997)、先史時代の考古資料から積上げていった都市化の結実である都市の姿を重ね合わせる試みが少ない。

3.4. ダム建設と「ウルクエクспанション」

古代西アジアの都市化あるいは国家形成の議論において、先史時代の考古資料から辿っていく「複雑化した社会」が、歴史時代の文献史料から敷衍する初期都市像に歩み寄る場面はほとんど見られなかった。1970年代以降、「単純から複雑へ」という変遷原理に同調する先史考古学は、考古資料そのものから先史社会像を描きながら、古代社会における国家的な社会構造を読む取る方向で進展していった。

アメリカの考古学者 H. ライトとジョンソンは、南西イランのフジスタン地方における調査にもとづいて、紀元前4千年紀の同地域における初期国家の出現について論じている (Wright and Johnson 1975)。印章やブッラ（紐の結び目に封をした粘土塊）のような考古資料に注目して (図7)、これらは行政的な官僚制の明白な証拠であり、階層化された集落間において専門化や意思決定レベルを示唆していると読み取ったのである。管見では、ライトとジョンソンの論考あたりから、国家的な社会構造の一端を示す考古資料として、見過ごされがちだった微細な遺物が注目されていったようだ。

さらにライトは、メソポタミアの国家形成論を独自に展開している (Wright 1977)。サービスの段階的な社会進化論に照らし合わせると、南西イランのフジスタン地方におけるウルク期の社会は、単純かつ非集権的な「首長制」段階ではなく、初期国家の段階に相当するという。この主張の背景には、人口集住としての都市化は、初

期国家の出現した後に起きる事象であるという見方がある。さらに、ウルク期の社会構造の特徴として、集落間をつなぐ行政的なネットワークも想定している。なお、アダムズは、ライトの国家形成論に対してかなり慎重な対応を示しており、これはイラン南西部のフジスタン地方に限定された都市化現象であり、メソポタミア地方も含めた全体に一般化することは難しいと見なしている(Adams 1981: 77)。

小物類のなかで、とくにトークンと呼ばれるゲームの駒のような小型土製品こそ(図8)、情報伝達における重要なツールであったと捉えたのが、アメリカの考古美術学者 D. シュマント=ベッセラである。彼女は、トークンという従来あまり取上げられてこなかった小物を始めとして、ブッラ、封球、各種封泥、数字粘土板、絵文字粘土板などを総合的に分析していった(Schmandt-Besserat 1974, 1992; シュマント=ベッセラ 2008)。西アジアにおいて、楔形文字の出現以前に記憶補助装置としてトークンが発明されていて、都市化の進展とともに情報伝達手段として発展していったというのが彼女の仮説である。

こういった小物類などに注目して、社会の複雑化を捉えていこうとするアプローチは、先述のフラナリーの議論に通底している。社会の複雑化の度合いが極まるにつれて、情報処理などの需要の高まりから、中央の行政的な管理、さらには官僚制的な組織が編成されていくことになる。西アジアの都市化あるいは国家形成の解明において、トークンやブッラといった小物類や各種粘土板資料の存在が重要な手掛かりの一翼を担っているのである。西アジア先史考古学が、他の地域に比べて社会の複雑化を追究しやすいのは、これらの遺物が豊富かつ層位的に出土しており、その時間的な変化を追いかけてやすいという点にある。

西アジアにおいて、溢れんばかりの考古資料をもたらす切掛けとなったのが、60年代後半に始まった国家主導によるダム建設である。とくに70~80年代、イラク、シリア、トルコなどの各国が競うようにしてダム建設に着手していった。こうした国家プロジェクトの発動により、現代の村と共に古代の遺跡が水没してしまうことになった。

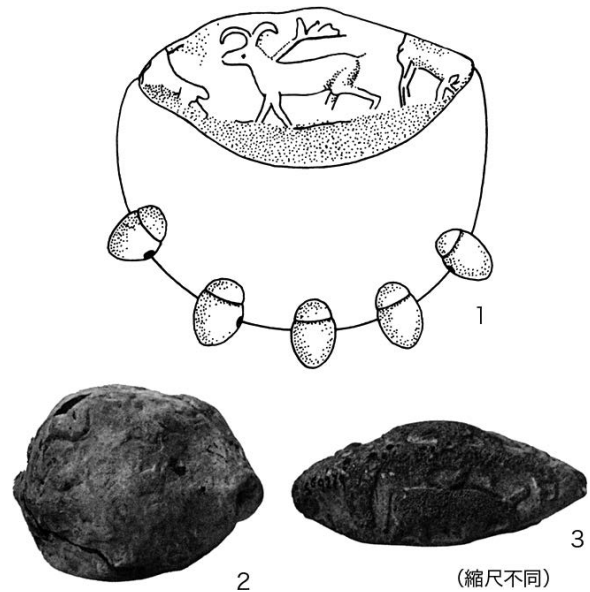


図7 ブッラ
1 ブッラ・穿孔トークン復原図(シュマント=ベッセラ 2008: 図11), 2-3 スーサ出土ブッラ(ibid. 図10)



図8 トークンと封球
1 プレイン・トークン(シュマント=ベッセラ 2008: 図3), 2 封球とコンプレックス・トークン(ウルク出土, ibid. 図12)

そこで、失われつつあった文化遺産を救済（記録）するために、欧米や日本の外国隊が参集して、それぞれの遺跡で独自の調査を展開していった。70年代の日本人によるダム水没予定地での活動としては、国士舘大学イラク古代文化研究所のイラクにおける一連の調査が際立っている。

ダム建設のラッシュにより、都市化あるいは国家形成を示唆する考古資料が着実に累積していき、西アジアの都市や国家の形成過程に関する研究がより深化し始めた。たとえば、現シリアでは、すでに1965年より、ユーフラテス川上流域に建設されるタブカ・ダム（アサド湖）に水没する遺跡の緊急発掘調査が開始された。同ダム水没予定地で調査された遺跡のなかで、都市形成期の証拠として最も重要であったのがハブーバ・カビーラ南である。ドイツ隊によって調査された本遺跡は、西アジアにおける都市化の帰結点として開花した最古級の都市そのものが具現されていた。しかも、ハブーバ・カビーラ南で見つかった神殿建築、土器、絵文字粘土板などは、ことごとく南方のウルク遺跡で確認されていた考古資料と類似していたことから、両者の密接なつながりが想定された。

1980年代になると、ダム建設による緊急発掘調査の流れに加えて、西アジア諸国における相次ぐ革命と戦争がメソポタミア周辺地域における調査の勢いに拍車をかけていった。1979年2月に起きたイラン革命、翌年に始まったイラク・イラン戦争を発端とする情勢不安は、考古学の動向を大きく左右することになった。イラクおよびイランにおける出口の見えない戦争・内紛、不安定な情勢により、シュメール地方を始めとしたメソポタミアで調査をしていた外国隊がことごとく近隣へ疎開してしまったのである。80年代以降、こうした政治不安の影響により、考古学者はそれまで以上にシリア、トルコ、ヨルダンなどに軸足を移すことになり、シュメール地方での発掘調査が停滞する代わりに、周辺地域での調査成果が着実に累積していった。この頃の日本隊の動向として、西アジアでの調査を主導してきた東京大学隊もイラク・イランからシリアへと調査地を転向している⁸。

政治動向に歩調を合わせながら、自ずとメソポタミアの都市化は周辺地域からの眼差しで再考されていくことになる。シュメール地方を発信源とする都市化の波が、南東アナトリア、北シリア、北メソポタミアから南西イランにかけての広範囲へ拡散していった現象は、一般的に「ウルクエクспанション（ウルク文化の拡大）」と呼ばれている（Algaze 1989; Oates 1993; 小泉 2002 a）。シュメール地方に生まれたウルク文化がメソポタミアの周辺地域へ拡散していき、あたかもこれらの在地文化を上書きしていったかのように見えた。先のハブーバ・カビーラ南などは、ユーフラテス川上流域の資源獲得を目的として人工的に建設された地方都市とされ、しばしばウルク社会の「植民地」と呼ばれた。ウルクエクспанションは、ウルク文化の遺構・遺物の共通様式が広範かつ同質に拡散していった状態を示し、中心と周辺为非対称的な構図を十分に予感させるものであった。

1980年代、ハブーバ・カビーラ南をはじめとしたウルク期関連の遺跡の成果報告が次々となされ、南東アナトリア、北シリア、北メソポタミア、南西イランにおけるウルクエクспанションの実例が広く知られるようになった。この時期には、ダム水没予定地における調査関連の速報シンポジウムだけでなく、さまざまなテーマのワークショップも開催された。

たとえば、アメリカのペンシルバニア大学博物館で開かれた研究部会（1987年）では、トルコ、シリア、イラク、イランなどからの最新の発掘成果がもち寄られて、ウルク期の周辺地域における地域的な交易や経済的な植民地化の拡大が、どのようにしてウルク文化の考古資料に現れているのかが問題定義された（Rothman *et al.* 1989: 279）。

8 2010年に端を発した「アラブの春」の影響により、2012年12月現在、各国調査隊のシリアでの活動は停止してしまっている。

ほかに、アメリカ人類学協会（AAA= American Anthropological Association）の定例会合（1989年）では、ウルク期における首長制が再解釈されて、西アジアの初期国家形成が議論された。同会合の報告集において、G. スタインと M.S. ロスマンは、管理支配構造を強調した同質な中央集権国家についての静的な「トップ・ダウン」モデルから、社会組織に着目した異質な政体についての動的な「ボトム・アップ」モデルへの切り替えを提唱している（Stein and Rothman (eds.) 1994）。

一連の会合における最大の関心事は、紀元前4千年紀のウルク期に関連した考古資料が急増するなかで、各遺跡で最大公約数的に共通する「社会の複雑化」の物的証拠であった。とくに、シュメール地方のウルク遺跡と近縁関係にある証拠とされたのが、上述した粗製の外傾面取口縁鉢である⁹（cf. 図4:1, 2）。この鉢が出土する南東アナトリアや北シリアなどの遺跡は、「植民地」あるいは「包領（飛び地）」「前哨地」として分類され、シュメールのウルク社会の直接的な影響化にあったと想定された（Oates 1993: 411-412）。

3.5. 中心による周辺の支配

1990年代の人類学の議論において、複雑化した社会が「権力」「管理」「支配」といったキーワードで解釈される傾向が目立ってくる。60年代に提示された段階的な社会進化論や、「単純から複雑へ」という変遷原理は微修正されながら引き継がれ、社会が複雑化するおもな要因を権力や管理といった側面から捉えようという傾向が強くなる。集落における共同生活のもとで、人々は食糧をはじめとしたさまざまな資源の所有権をどのようにして獲得していったのか、という時系列上の変化プロセスなどに関心が集まっていった。このような人類学で発案された、「複雑化した社会」を権力や支配といった切り口で追究する視座は、近年の首長制や初期国家の考古学的研究の主流となっている（Matthews 2003: 94-95）。

アメリカの考古学者 T. アールは、複雑化した社会の権力や支配の出現に注目して、多様性を内包する首長制モデルを提言している。彼によると、段階的な階位システムが機能していた単純な首長制社会では、各種奉仕への報酬として「食糧による財貨 staple finance」が饗宴で振る舞われた。他方、階層化された複雑な首長制社会では、長距離交易や従属的な専業生産などで獲得された「富による財貨 wealth finance」が特定の個人に集中していった。前者は協働により食糧財を構築していく集団指導型の首長制社会であるのに対して、後者は威信財や居館などで社会的地位や経済的特権が明示される個人的なエリート支配の首長制社会であるという（Earle 1991: 2-3; 小泉 2001: 60）。

他方、各地域ごとの目線で、メソポタミア全体の社会変化とは距離を置くアプローチも提言されている。S. ポロックは、ウルク期をめぐる研究史の整理と新提案を行った。彼女は、地球規模的な視点や高度な法則化や抽出化により理論体系の構築を追及する研究姿勢に疑問をもち、大局的にとらえた社会・文化発展が個々の地域に与える影響に着目すべきであるとした。そして、管理機構の視点からウルク〜ジェムデット・ナスル期の社会を捉えている、いわゆる「トップ・ダウン」式ではなく、経済文書、印章・封泥、共同体内の製品の生産・消費などを「ボトム・アップ」式に追及し、全体的な社会的・文化的コンテクスト（脈絡）を背景とした地域的な活動を探る必要がある、と述べている（Pollock 1992: 328-332）。

さらに、メソポタミアを中心とする都市化あるいは国家形成の議論では、ウルク期に先行するウバイド期の存

9 ただ、外傾面取口縁鉢は、細かく観察するといくつかの型式に分類可能であり、表採資料ではなく、原位置で出土した発掘資料による変遷や分布の見直しが必要とされつつある。

在もしだいに注目されていった。オーツは、紀元前5千年紀のウバイド期の段階において、すでに「エクспанション」現象が始まっていたと指摘している。彼女によると、ウバイド期の人々は、各種金属資源をもとめてユーフラテス川上流域を遡上して南東アナトリアに進出したり、南方の湾岸地域へ乗り出していったという。ウバイド期には、やがてウルク期に出現する交易ネットワークの前身がすでに出来上がっており、ウルク期以降になると非対称の交易関係に変質していき、シュメール地方の国家形成に主要な動因となっていったと主張している (Oates 1993: 417)。

ほぼ同じ頃、西アジアの都市化議論において大きな節目となったのが、アメリカの考古学者 G. アルガゼによる「ウルクワールドシステム」モデルである (Algaze 1993, 2005; 小泉 2002a)。90年代初頭までに、メソポタミアの周辺地域において、ダム建設に伴う緊急発掘調査や紛争地から疎開してきた調査隊の活動などにより、南東アナトリア、北シリア、北メソポタミア、南西イランといった広範な地域におよぶ同質なウルク文化の考古資料が急増してきたため、これらを包括する解釈モデルが必要とされた。ウルクワールドシステムは、先のウルクエクспанション (ウルク文化の拡大) で予感されていた、中心としてのウルク社会が周辺地域を支配するという構図を全面的に押し出した議論であった。ウルクワールドシステムは、すでに人類学で示されていた「権力」、「管理」、「支配」による「複雑化した社会」の捉え方と同路線にあるが、アルガゼは社会変化の第一要因として交易を重視している。

アルガゼによると、紀元前4千年紀後半の「周辺」地域におけるウルク期のセトルメントは、すでに確立されていた交易路上の重要な結節点に立地し、「包領」、「駐屯地」、「前哨地」の3階層に分類される (図9)。包領あるいは飛び地は、北メソポタミアを横断する東西陸路や河川の南北水路の交差地に立地する大規模な地方都市であり、ハブーバ・カビーラ南を始めとして、ジェベル・アルーダ、アルスランテペ、テル・ブラク、ニネヴェなどが想定されている。駐屯地は、メソポタミア平原の主要交易路沿いに立地した小規模な中継地で、ハッセク・ホユック、テル・クラヤなどが相当し、前哨地は、イラン高地などの山間溪谷で孤立した小規模の前線基地で、ゴディン・テペやテベ・シアルクなどが相当するという (cf. 図1)。

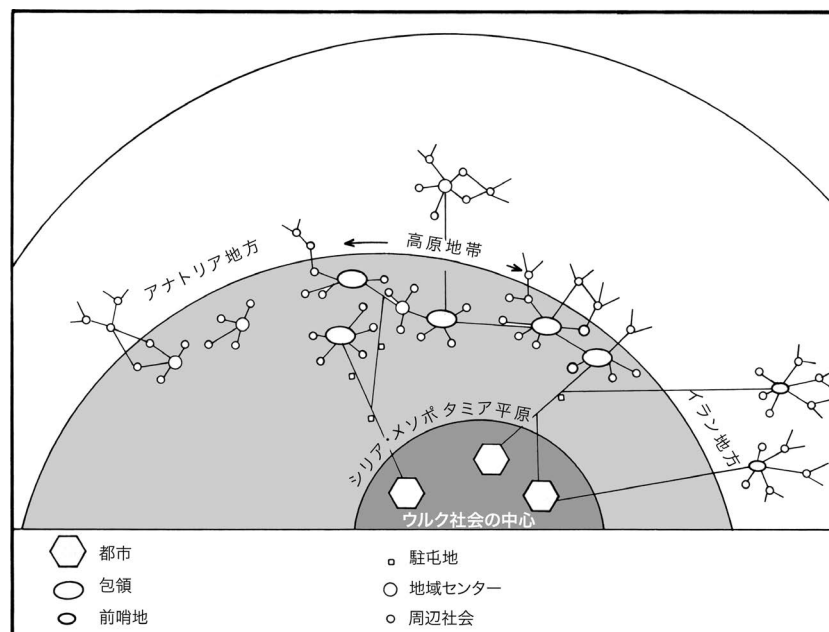


図9 アルガゼのウルクワールドシステム (Algaze 2005: Fig. 47より作成)

ウルクワールドシステムでは、「周辺」に配置されたこういった交易拠点を媒介にして、ウルク社会などの「中心」が必要資源を獲得していき、国家形成に拍車がかかっていったという。「中心」と「周辺」の交易関係は本質的に不平等であり、前者の政治組織は発展途上にあった後者から最小限の労力で最大限の資源獲得が可能になったとされる。アルガゼは、地域文化の枠組みを越えた経済的な従属と支配の関係を軸とした I. ウォーラーステインの「世界システム」論を修正して、近代国家成立よりはるか昔のウルク期に当てはめようとしたのである。

すぐさま、この大胆な試みへの反動が起きる。ウルクワールドシステムの主要概念は「中心」と「周辺」であったが、中心として想定されたシュメール地方のウルク社会そのものは不透明なままであり、良く分からないウルク社会が周辺地域を支配するという構図が描かれていた。各方面の研究者から最も批判が集中したのは、「中心」が「周辺」を支配するという捉え方であった。1990年代末、欧米で開催されたいくつかの国際会合において「ウルクワールドシステム」モデルが再検証されていった。

海外だけでなく、日本でもウルクワールドシステムへの反応が起きている。2001年、日本西アジア考古学会の第6回総会・大会（中近東文化センター）において、討論会『「ウルク・ワールド・システム」をめぐる一都市形成期の文化拡散―』が開催され、各地域の専門家がそれぞれの見地からウルクワールドシステムを批判的に議論した。発表原稿等は特集「中心と周辺一周辺から見たメソポタミア」は同学会誌に掲載され、総括でウルクワールドシステムの現状と今後の展開について整理されている（小泉 2002b）。

4. 研究の現状と都市の定義

4.1. 対等と競合

「中心」と「周辺」に代わって、研究者間に浸透していったのが「対等」や「競合」という概念であった。発端としては、おそらくレンフリューらの議論があったと思われる。レンフリューは、ウォーラーステインの「世界システム」論で扱われるような広範囲の枠組みを設定しておらず、社会変化を遠方から伝播してくるような外的要因に求めなかった。その代わり、メソポタミアの限られた環境で「対等政体 peer polities」が乱立し、互いに競合関係を保ちながら、社会全体が変化していったという見通しを示した（図10）。つまり、ウルク中期から後期（紀元前4千年紀中頃～後半）にかけて、南メソポタミア地域のなかで多くの政治集団が相互に近接しながら共存していたため、結果として競合、交換、模倣、技術革新といった社会変化プロセスが進行していったという主張である（Renfrew 1986: 6-8; Algaze 2008: 123）。

1980年代末に、すでにこうした「競合」概念は研究者間で意識されていたが、90年代後半よりウルクワールドシステムへの批判が高まる頃に顕在化していったと見られる。アルガゼ自身も、「中心」においてウルクなどの複数の政治組織が競合関係にあったという前提

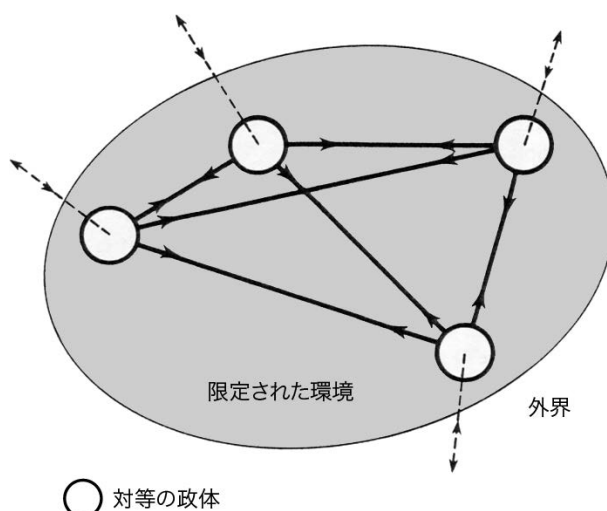


図10 レンフリューの「対等政体」モデル（Renfrew 1986: Fig. 1.5 より作成）

から出発したものの、「競合」概念とウルクワールドシステムの経済的な一元化支配とのすり合わせに頓挫している（小泉 2002b: 69-70）。アルガゼのモデルに限らず、たいていの場合にウルクエクспанションは、中心であるシュメール地方のウルク社会が周辺地域を支配していたという構図で捉えられてきた。

湾岸戦争後、シュメール地方での発掘調査は停止したままであった一方で、南東アナトリアや北シリアではつぎつぎと調査が展開していき、都市化あるいは国家形成期の新資料が着実に累積していった。こうした周辺地域での調査件数の増加とともに在地諸社会が注目されていき、在地の目線でウルク社会からもたらされた外来の文化との対等性や競合関係を比較検討しながら、メソポタミア全体の都市化や国家形成を模索していく視座が展開していった。つまり、「中心」と「周辺」の構図は、シュメール地方のウルク社会と近隣地域の在地諸社会に置き換えられて、両者間の非対称な経済的な関係は多様性の一つとして解釈されていくようになった（小泉 2002b: 68）。

1998年、サンタフェで開催された SAR のセミナーで、メソポタミアとその近隣地域における国家形成期の編年措置および問題点の整理が試みられた（Rothman (ed.) 2001）。アメリカ系の人類学的モデルの構築を追究する考古学者と、ヨーロッパ系の地域的な文化編年の構築を目指す考古学者が一同に介して熱い議論を展開した。ここでは、紀元前5千年紀後半から4千年紀にかけて、メソポタミアとその近隣地域でどのように国家形成が進展していったのかを体系的に捉えようとする議論が交わされた。ウバイド期後半からウルク期にかけての都市化、複雑な首長制や国家といった社会組織の行政的機能、広大な地域におよぶ交易や経済的な相互依存関係などがテーマとなった。

サンタフェでの会合の結果、「LC (Late Chalcolithic) 編年」が提唱され、後期銅石器時代が大まかに5期区分（LC1～LC5）された。メソポタミアと隣接地域において、混乱する専門用語を整理しながら、エンティティ（ガウラ XI 層といったひとかたまりの物質文化）を比較する枠組みを設定して、ウルクエクспанションを時空軸で捉えようというねらいがあった。LC 編年の成果として、ウルクエクспанションは予想（ウルク後期頃）以上に古くから始まっていたことが分かった。そして、その期間は、放射性炭素測定値の較正年代にもとづいて、LC 4（ウルク中期：紀元前3600年頃）から LC5（ウルク後期：紀元前3350～3000年頃）にかけての約600年間におよぶことが想定された。

他方、LC 編年の問題点として、LC1～LC2 について研究者間の（報告集の執筆者間でさえも）解釈に温度差がある。とくに、LC1（ウバイド終末期）については、資料数が少ないせいもあって、ウバイド後期からの移行に関して説明不足のままである。また、LC2（ポスト・ウバイド期／ウルク前期）については、時期幅が予想以上に長いため、前期と後期に細分の可能性がある。さらに、Pre-LC なる新たな用語も登場し、用語の単純化という本来の主旨に矛盾してしまっている。総じて、LC4～LC5 以外は、無批判に飛びつく姿勢は避けるべきであろう。とりわけ、LC1～LC2（ウバイド終末期からウルク前期にかけて）の層位的な発掘調査の成果を整合する作業が待たれる（小泉 2007）。

1998年秋、イギリスのマンチェスターで開かれた国際会議では、ウルク期における社会の複雑化を考古学的に検証する研究・調査が報告された（Postgate (ed.) 2002; 小泉 1999）。アナトリア、シリア、北メソポタミア、イランにおけるウルク土器と在地土器の割合比較と土器編年の措置を始めとして、行政機能を示す遺物（円筒印章・封泥など）の比較分析や図像解釈による空間分析や、土器や封泥の産地同定などが発表された。全体として、国家形成期におけるウルク文化の拡散について、それぞれの地域でより具体的に迫っていく方向性と文化呼称の問題点が浮き彫りにされた。

なお、日本では、「古代オリエントにおける都市形成とその展開」という研究活動報告において、立場の異なる研究者が都市を議論するときの指標が検討され、青銅器時代の都市展開の理解に向けてさまざまな角度から議論がおこなわれた（近藤編 1999）。近年では、日本西アジア考古学会主催のシンポジウム「西アジア・エジプトにおける古代都市の成立と発展」にて、各地域・時代における都市の在り方がいかに多様なものであるのかが再認識された（日本西アジア考古学会編 2010）。

4.2. 都市化議論抄出

西アジアの都市化をめぐる議論は、これまで紹介してきたように多様な道のりを歩んできた。ここで、年代ごとの推移を簡単にまとめておく。

1950年代、チャイルドは、唯物史観を起点としながら、生業経済の発展によりもたらされた余剰食糧が社会余剰へと昇華していく、という都市化の基本的な図式をつくった。チャイルドの「都市革命」論では、人類学から社会の変遷原理が考古学へ移植されて、都市化の帰結点である都市そのものはモルガン流の社会発展の文明段階で登場するという枠組みで語られていた。しだいに、都市と文明の定義が両義的なまま「都市＝文明」論が展開していき、やがては文明という用語そのものが敬遠されがちになる。

1960年前後には、人類学における新進化主義の台頭とともに、文化変化の環境的な要因や、現代の民族誌資料にもとづくサーヴィスらの段階的な社会進化論が注目されていった。メソポタミアのフィールドでは、プロセス考古学的な手法が採用され、アダムズらがセトルメントパターン研究に取り組んでいくことになる。その頃から、メソポタミアでは都市化に代わって国家形成に照準が合わさり、「都市＝国家」論の土台がつくられていった。

1970年代になると、人類学的な社会進化論から投影された「社会の複雑化」という潮流に導かれて国家形成論が進展していき、「単純から複雑へ」という変遷原理が定着していく。西アジアにおける「社会の複雑化」研究は、北米の人類学＝考古学界を中心に展開していった。この頃から、モノとしての考古資料の解釈に、理化学的な分析方法の開発や民族誌資料の蓄積など、隣接分野の研究成果にもとづく外挿モデルが盛んに援用された。都市化の発端となる余剰食糧の発生に関して、環境変動に起因した人口圧などの内的な要因が作業仮設的に説明されていった。

同時に、内的な要因だけでなく、外的な要因として旧来の伝播論に代わる交換・交易が新たに注目されていった。すでに20世紀初頭には単系進化論の信用度は落ちてしまっていて、モンテリウスやチャイルドらによりヨーロッパ先史考古学界では伝播論的な視座が普及していた。1970年代になると、レンフリューを皮切りに、移住や伝播に代わるさらに新しい視点、すなわち交換や交易によって国家形成を議論する流れが出てきた。

さらに、地理学モデルを援用したセトルメントパターン研究により、それまでのサーヴェイや発掘で得られていた考古資料の空間的拡がりが解釈されていった。そして、70年代中頃より考古学者は、広範囲に分布する考古資料のなかでトークンやブッラといった小物類に着眼して、都市化や国家形成を示唆する考古資料の集積と分析に力を注いでいった。そこには、70年代以降に西アジア諸国のダム建設により、水没予定遺跡の緊急発掘調査が盛行したという背景があり、長期間にわたる地域史復原を目指す研究が本格化していった。

1980年代になると、数々の政治不安に左右されながら、イラク・イラン以外の諸国へとフィールドが移るようになった。しだいに、中心地であるメソポタミアから遠く離れた周辺地域において、同質なウルク文化が拡散していた様子が明らかになり、ウルク期における均質な物質文化の拡大はウルクエクспанションと呼ばれた。

1990年代に入ってもなく、前4千年紀のウルクエクスパンションに関する膨大な資料の分布を体系的に説明する解釈モデルとして、中心であるシュメール地方のウルク社会が周辺の社会を一元的に支配するというウルクワールドシステムが提唱された。その背景には、人類学で編み出された「複雑化した社会」を権力や支配といった切り口で捉える視座があり、この方向性は近年の首長制や初期国家の考古学的研究に通底している。

1990年代後半以降、ウルクワールドシステムへの反動として、中心が周辺を支配する構図に代わって、シュメール地方のウルク社会と周辺地域の在地諸社会の対等性や競合関係が議論されていった。この多様性を重視する議論は2000年以降も続き、現在に至っている。

4.3. 都市化研究の問題点

人類学における、段階的な社会進化論の根幹となっていた「単純から複雑へ」という変遷原理は、考古学の世界で広範に浸透してきている。この傾向は今後とも継続していくであろう。複雑化の解明は、時間軸上の変化を捉えるという考古学の究極的な御題としっくり合っているからだ。19世紀前半のトムセンによる、石器、青銅器、鉄器という利器の材質の違いを基準とした「3時代法」、19世紀末のモンテリウスによる、単純かつ機能的な属性が精巧な装飾へと発展していく「考古学的型式論」など、時間の経過とともにモノが変化していく概念は考古学の根本原理である。よって、隣接分野で編み出された「単純から複雑へ」という概念は、考古学へ違和感なく吸収されていったと見られる。

現状において、古代西アジアのなかでもメソポタミアの都市出現期をめぐる研究のほとんどは、「社会の複雑化」の概念枠で把握することができる。メソポタミアの都市化をめぐる議論では、考古学的な物質文化の広がりとして認められるウルクエクスパンションという現象を、いかにして時間軸上の変化プロセスに整合させて説明するのが問われている。意識するしないに関わらず、多くのメソポタミアの都市化を追究している考古学者は、地域的な文化編年の構築という伝統的な考古学に軸足を乗せながら、何らかの変化傾向や社会構造をプロセス考古学的に見据える格好になっている。

では、これだけ充実していきっている都市化研究が、ぼんやりとした印象を周囲に与えてしまっているのはなぜだろうか。たしかに、長引く政治不安により、シュメール地方で都市誕生の鍵を握るウルク期初頭の層位情報が入手できない状況になってから久しい。しかし、ストーンが的確に指摘しているように、現状の欲求不満の一つは、紀元前3千年紀に文明が十分に発展しきった段階で史料に記された社会変化が、メソポタミアの（初期）都市像として仕立て上げられてしまっている、という点にある（Stone 1995: 235）。完成された都市からその生立ちを振り返ろうとしても、なかなか都市形成過程は見えてこない。都市化そのもののみに焦点を絞って追求していくことが、古代西アジアの都市誕生を解明する手がかりになると考えられる。

また、西アジアの都市化研究に底流する問題点は、都市と国家をあいまいに語っているところにもある。はたして、都市化を追究する上で、まず国家ありきの目線で語り始めること自体にかなり違和感を覚えるのは筆者だけであろうか。国家は「最初から在った」のではなく、「造られていった」のであり、都市化の進行過程において国家的な行政機能が形成されていき、都市が誕生した後になってようやく国家的な組織が出現したのである。M. L. スミスらの、都市が存在し繁栄するためには国家的な段階の政治権力を必要とはしないという指摘にあるように（Smith 2003: 12）、都市の出現を語る議論であまりにも国家に引きずられている傾向が目立つ。

何よりも、都市国家の完成後の目線から都市化を振り返って、既存の権力や支配といった枠組みで単眼的に捉

える姿勢は避けなければならない。国家や政治権力という視座は、現代社会におけるトップ・ダウン的な目線である。こうした視座は、現代の民族誌資料の集積にもとづいて抽出された変化傾向にもとづいているだけでなく、歴史時代の文献史料から先史社会像を投影してもいる。これまでアッシリア学が歴史時代の都市研究によって投げかけてきた初期都市像に対して、先史考古学が整合性のある見解で応えているとは言い切れない。

古代西アジアのフィールドにおいて、歴史時代の完成された都市ではなく、先史時代から連綿とつづく都市化そのものを捉えようという場面では、トップ・ダウン的な目線ではなく、データを地道に積上げていくボトム・アップ的な見通しが求められてこよう。筆者は、チャイルド流にモノの集積としての考古学的文化の分類整理に立ち返って、モノの技術的変遷を一つの縦糸として、その背景にある社会的な発展過程を追いかけていく手法を強調したい。やはり、当たり前の作業を地道に積み重ねていくしかないであろう。

もともと、都市化におけるハード（城壁、街路、区画整備、水利施設、大型独立倉庫、市場、支配者の館、絵文字、神殿など）の出現過程については、モノの変化を追いかけるという目線の考古学が得意とするテーマである。それに対して、国家形成というソフト（権力、管理、支配など）の追究に関しては、時系列に縛られない通文化研究を持ち味とする人類学的アプローチによる成果が大きい。

これまで、考古学を人類学の一枝とみなす北米の学界主導で議論が展開してきたため、地域史復原を目指すヨーロッパ系のいわゆる文化編年の手法が影にかすれがちであった。ビンフォード以来、旧世代の「文化編年」論に対する批判がすさまじかったため、考古学本来の持ち味である時系列に沿ったモノの変化を丁寧に辿っていく、という基本的な作業があまり重視されない嫌いがある（cf. Stone 2003: 187; フェイガン 2010: 223-228）。筆者はそこに素朴な疑問を持っている。モノから辿った都市化を時系列で整合的に体系化してこそ、国家や権力といったソフトの議論が活かされ、対等や競合といった多様な関係性が的確に捉えられるのではないだろうか。

5. まとめにかえて

筆者は、集落での生活という目線から、西アジアにおける都市化とは、より快適な暮らしを求める過程そのものであると想定している。生活環境の改善に向けた都市化への歩みは、ウバイド期の段階で芽生え始め、ウルク期になって本格的に展開し、やがて都市へと華開くことになる。定住生活に立脚した農耕牧畜が軌道に乗り、土器の普及により生活利用範囲が拡大してきたウバイド期の社会の中で、日々の暮らしにおけるさまざまな不具合を改善するために、物的にも心的にも快適さへの追究が広範囲に高まっていく。やがてウルク期において、特定の集落で暮らしやすさの指向性が見事に結実して、都市という空間が創出されたと考えている。

ここで気をつけなければならないのは、ウバイド期に芽生えてウルク期に顕在化する都市化現象は、西アジア各地に普及していたが、都市そのものは特定の集落（ウルク）においてのみ開花したという点である。つまり、西アジアにおける都市化は広範囲に進行していたのに対して、都市自体の誕生はきわめて限定的であった。ウルク期のたいていの集落は、都市化の影響を受けながらも、都市そのものに成り切れていない。都市化の議論においてこのような集落を一般集落や都市から区別しておいた方が理解しやすい。

そこで筆者は、一般集落と都市の中間的な存在として都市的集落を位置づけて、古代西アジアの都市を一般集落や都市的集落から区別するための必要十分条件として「都市計画性」、「行政機構」、「祭祀施設」の3つを提唱してきた（小泉 2001, 2010）。

古典的な西アジアの都市の指標としては、チャイルドを始めとした諸説を先に紹介した通りである。たしかに、指標の羅列そのものを疑問視する意見もあり、すべての指標を考古学的に検証することは難しい。しかし、都市化の議論の入口、すなわち都市誕生に向かう変遷過程を捉える切り口として、こういった指標の設定は必要である。軸を定めた方が議論の方向性が明瞭になるので、多くの項目の中から上記の3つの指標に絞り込み、都市化議論の再起点としたい。いずれも、西アジアにおける発掘調査で実証されている成果にもとづいており、考古学的に観察しうる項目である。筆者の定義では、これらの指標をすべて満たせば都市、一部が欠ければ都市的集落、ほとんどなければ一般集落となる。

実際に、西アジアの中心に位置するメソポタミア地方では、ウバイド期に展開していた一般集落の中から都市的な性格を持つものが現れ、紀元前4千年紀のウルク期において本格的に都市的な性格を帯びた集落が出現し、ウルク後期(約5,300年前)に都市が誕生する。今のところ、ウルク後期の段階で都市と呼べる遺跡はウルクとハブーバ・カビーラ南の2つしか確認されていない。エリドゥ、ウル、ガウラ、ブラクといった地域的な拠点に立地する有力な集落は、ほとんどが都市的集落に位置づけられる。

もちろん、この時期においても一般集落が圧倒的大多数を占め、これらの集落によって都市が扶養されていたと推定される。古代西アジアにおいて、物質的にも精神的にも、より快適な暮らしを指向する中で都市化現象が起こり、いくつかの集落で都市化が本格的に進行していき、ウルクのようなさらに限定された集落で都市化が最も効果的に結実して、ようやく都市が誕生したと想像される。

先史時代の遺跡で発掘した考古資料を先史社会像へと解釈するために、これまで考古学者は隣接分野の研究成果を借用してきた。「単純から複雑へ」という、人類学によって提示された社会進化論の流れは今後とも都市化研究の基層となるであろう。ただ、こうした隣接分野の示す社会変化の根本原理を考古学側で消化するにあたって、吸収できるだけの骨格を整えておかねばならない。基本的な方法論を層位論と型式論に拠っている考古学は、層序にもとづく資料の時間的な前後関係や、時系列におけるモノの微少な変化の把握を主眼としている。

つまり、ここでいう考古学的な消化とは、考古学で準備したモノの時間軸上の配列、すなわち編年体系に、社会進化論的な意味付けをするという作業が主体になる。予め考古学の側には、その骨格となる基礎資料の整合性を高めておくことが求められている。考古学の得意とするモノの時間的変化を切り口として、国家的な様相や権力といった捉えにくいソフトの輪郭をいかに描写していくのが、今後の都市化議論の課題と予想される。

引用・参考文献

Adams, R. McC.

1960 *The Origin of Cities. Scientific American* 203/3: 153-168.

1966 *The Evolution of Urban Society*. Chicago, Aldine.

1981 *Heartland of Cities: The Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*. Chicago, University of Chicago Press.

Adams, R. McC. and H. J. Nissen

1972 *The Uruk Countryside: The Natural Setting of Urban Societies*. Chicago, University of Chicago Press.

Algaze, G.

1989 The Uruk Expansion: Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. *Current Anthropology* 30: 571-608.

1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*, 1st ed. Chicago and London,

- University of Chicago Press.
- 2005 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*, 2nd ed. Chicago and London, University of Chicago Press.
- 2008 *Ancient Mesopotamia at the Dawn of Civilization: The Evolution of an Urban Landscape*. Chicago and London, The University of Chicago Press.
- Bietak M.
- 1979 Urban Archaeology and the “Town Problem” in Ancient Egypt. In K. R. Weeks (ed.), *Egyptology and the Social Sciences: Five Studies*, 97–144. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Binford, L. R.
- 1983 *In Pursuit of the Past*. London and New York, Thames and Hudson.
- Boserup, E.
- 1965 *The Conditions of Agricultural Growth: The Economics of Agrarian Change under Population Pressure*. Chicago, Aldine.
- Carneiro, R. L.
- 1970 A Theory of the Origin of the State. *Science* 169: 733–738.
- Childe, V. G.
- 1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21/1: 3–17.
- 1957 Civilization, Cities, and Towns. *Antiquity* 31: 36–38.
- Earle, T. K.
- 1991 The Evolution of Chiefdoms. In T. K. Earle (ed.), *Chiefdoms, Power, Economy, and Ideology*, 1–15. Cambridge, Cambridge University Press.
- Flannery, K. V.
- 1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3: 399–426.
- Fried, M. H.
- 1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*. New York, Random House.
- Gibson, M.
- 1973 Population Shift and the Rise of Mesopotamian Civilization. In C. Renfrew (ed.), *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*, 447–463. London, Duckworth.
- Hawkins, J. D. (ed.)
- 1977 *Trade in the Ancient Near East*. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Jacobsen, T.
- 1995 Searching for Sumer and Akkad. In J. M. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, 2743–52. New York, Scribner.
- Johnson, G. A.
- 1975 Locational Analysis and the Investigation of Uruk Local Exchange Systems. In J.A. Sabloff and C.C. Lamberg-Karlovsky (eds.), *Ancient Civilization and Trade*, 285–339. Albuquerque, University of New Mexico Press.
- 1977 Aspects of Regional Analysis in Archaeology. *Annual Review of Anthropology* 6: 479–508.
- Kluckhohn, C.
- 1960 The Moral Order in the Expanding Society. In C.H. Kraeling and R.McC. Adams (eds.), *City Invincible: A Symposium on Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East held at the Oriental Institute of the University of Chicago, December 4–7, 1958*, 391–404. Chicago, the University of Chicago Press.
- Matthews, R.
- 2003 *The Archaeology of Mesopotamia: Theories and Approaches*. London and New York, Routledge.
- Oates, J.
- 1993 Trade and Power in the Fifth and Fourth Millennia BC: New Evidence from Northern Mesopotamia. *World*

- Archaeology* 24/3: 403–422.
- forthcoming The Proto-Urban (Uruk) Period in Northeast Syria. In P. Matthiae, M. Al-Maqdissi and W. Orthmann (eds.), *The Archaeology and History of Syria*, vol. 1.
- Pollock, S.
- 1992 Bureaucrats and Managers, Peasants and Pastoralists, Imperialists and Traders: Research on the Uruk and Jemdet Nasr Periods in Mesopotamia. *Journal of World Prehistory* 6/3: 297–336.
- 2001 The Uruk Period in Southern Mesopotamia. In Rothman (ed.) 2001, 181–231.
- Postgate, J. N.
- 1992 *Early Mesopotamia: Society and Economy at the Dawn of History*. London and New York, Routledge.
- Postgate, J. N. (ed.)
- 2002 *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. Wiltshire, British School of Archaeology in Iraq.
- Renfrew, C.
- 1969 Trade and Culture Process in European Prehistory. *Current Anthropology* 10/2–3: 151–169.
- 1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In C. Renfrew and J.F. Cherry (eds.), *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*, 1–18. Cambridge, Cambridge University Press.
- Renfrew, C. and P. Bahn
- 2000 *Archaeology: Theories, Methods, and Practice, 3rd ed.* London, Thames and Hudson.
- Roaf, M.
- 1990 *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. New York, Facts on File.
- Rothman, M. S. *et al.*
- 1989 Congr s, Colloques, Recensions. *Pal orient* 15/1: 279–290.
- Rothman, M. S. (ed.)
- 2001 *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*. Santa Fe, New Mexico, School of American Research Press; Oxford, James Currey Ltd.
- Sabloff, J. A. and C. C. Lamberg-Karlovsky (eds.)
- 1975 *Ancient Civilization and Trade*. Albuquerque, University of New Mexico Press.
- Schmandt-Besserat, D.
- 1974 The Use of Clay before Pottery in the Zagros. *Expedition* 16/2: 11–17.
- 1992 *Before Writing*. Austin, University of Texas Press.
- Service, E.
- 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York, Random House.
- Smith, Michael E.
- 2009 V. Gordon Childe and the Urban Revolution: A Historical Perspective on a Revolution in Urban Studies. *Town Planning Review* 80/1: 3–29.
- Smith, Monica L.
- 2003 Introduction: The Social Construction on Ancient Cities. In M.L. Smith (ed.), *The Social Construction of Ancient Cities*, 1–36. Washington and London, Smithsonian Books.
- Stein, G. and M. S. Rothman (eds.)
- 1994 *Chieftdoms and Early States in the Near East: The Organizational Dynamics of Complexity*. Monographs in World Archaeology 18. Wisconsin, Prehistory Press.
- Stone, E. C.
- 1995 The Development of Cities in Ancient Mesopotamia. In J. M. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, 235–248. New York, Charles Scribner's Sons.
- 2003 Mesopotamian Archaeology under the American Schools of Oriental Research. In D. R. Clark and V. H. Matthews

- (eds.), *One Hundred Years of American Archaeology in the Middle East: Proceedings of the American Schools of Oriental Research Centennial Celebration, Washington DC, April 2000*, 181–192. Boston, American Schools of Oriental Research.
- Sürenhagen, D.
 1986 The Dry-farming Belt: The Uruk Period and Subsequent Developments. In H. Weiss (ed.), *The Origins of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.*, 7–43. Guilford, Four Quarters Publishing.
- Van De Mieroop, M.
 1997 *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford, Clarendon Press.
- Wheeler, M.
 1956 The First Towns? *Antiquity* 30: 132–136.
- Wittfogel, K. A.
 1957 *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*. New Haven, Yale University Press.
- Wright, H. T.
 1977 Recent Research on the Origin of the State. *Annual Reviews in Anthropology* 6: 379–397.
- Wright, H. T. and G. A. Johnson
 1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran. *American Anthropologist* 77: 267–289.
- Yoffee, N.
 1981 *Explaining Trade in Ancient Western Asia. Monographs on the Ancient Near East, vol. 2*. Malibu, Undena Publications.
 2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge, Cambridge University Press.
- 川西宏幸
 1999 「都市の類型と変容」 近藤英夫編『古代オリエントにおける都市形成とその展開』103–111頁 東海大学文学部考古学研究室。
- 小泉龍人
 1999 「複雑さを示す遺物：近東におけるウルクをたどる」『日本西アジア考古学会通信』5号 22–25頁。
 2001 『都市誕生の考古学』世界の考古学17 同成社。
 2002 a 「ウルク・ワールド・システムとは何か」小泉龍人編「大会報告「ウルク・ワールド・システム」」『西アジア考古学』3号 47–49頁。
 2002 b 「ウルク・ワールド・システムの彼方」小泉龍人編「大会報告「ウルク・ワールド・システム」」『西アジア考古学』3号 67–73頁。
 2007 「メソポタミアにおける前4～3千年紀の編年—年代推定の基準と問題点—」『西アジア考古学の編年—日本の考古学調査団からのアプローチ—』6–11頁 日本西アジア考古学会。
 2010 「都市の起源と西アジア—より快適な暮らしを求めて—」後藤 明・木村喜博・安田喜憲編『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語— 第6巻 西アジア』50–82頁 朝倉書店。
 2011 「古代西アジアの情報伝達—都市におけるコミュニケーション・ツール」『西アジアにおける教育の起源と展開』第11回日本西アジア考古学会公開セミナー要旨集 4–12頁 日本西アジア考古学会・東北大学高等教育開発推進センター。
- コナー, G. (近藤義郎・河合信和訳)
 1993 『熱帯アフリカの都市化と国家形成』河出書房新社。
- 近藤英夫編
 1999 『古代オリエントにおける都市形成とその展開』東海大学文学部考古学研究室。
- 酒井龍一
 1990 『セトルメントアーケオロジ—』ニュー・サイエンス社。
- シュマンツ＝ベッセラ, D. (小口好昭・中田一郎訳)
 2008 『文字はこうして生まれた』岩波書店。

常木 晃

1990 「考古学における交換研究のための覚書 (1)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』1号 191-201頁。

1991 「考古学における交換研究のための覚書 (2)」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2号 178-191頁。

西アジア考古学勉強会

1994 「G. チャイルドの方法論を探る」『溯航』12号 1-45頁 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会。

日本西アジア考古学会 公開シンポジウム実行委員会編

2010 『西アジア・エジプトにおける古代都市の成立と発展—都市景観の背後にあるもの—』日本西アジア考古学会。

フェイガン, B. (小泉龍人訳)

2010 『考古学のあゆみ—古典期から未来に向けて—』朝倉書店。

前川和也

2010 「初期メソポタミア王権をめぐる文献学, 考古学, 図像学」『日本西アジア考古学会 第15回総会・大会要旨集』3-8頁 日本西アジア考古学会。